通俗文學全書第二編

大和田建樹著

新體詩學

歐米文學の空氣一たび壓入せしより新体詩の流行日に月に隆盛を極め雜誌に新聞に其作を見る事ほとんど虛日おきが如し然れども未だ嘗て之が作法を敎へ之が方針を示したる書の出でざるゝ遺憾あり此に至てか先生の此著あり書中に說く處開題に起りて次に新体詩の沿革より、句格、段格、用語、意匠、裝詞、文法、違例等の數章を經て、書式、讀法、作例、新案に終る其文解し易く其趣向實に面白し苟くも文學に志ある諸君子の興味と實益とを併せ得らるゝ蓋し此書に在らん

東京博文館藏版

通俗文學全書

第貳編

新體詩學 全

大和田建樹 著

東京 博文館藏版

本間文庫
文庫14
134

4

新體詩學 全

久保田達樹 著

東京
博文館藏版

新體詩學 全

大和田建樹著

東京 博文館藏版

文庫14
D134

新體詩學目次

(一)開題……一丁
(二)歷史……六丁
(三)種類……三十八丁
(四)句格……四十丁
(五)段格……四十八丁
(六)詞の撰方……五十六丁
(七)意匠の工夫……六十六丁
(八)裝詞の種類……八十丁
(九)文法の變格……九十一丁
(十)題の附方……九十七丁
(十一)書式……百三丁

(十二)讀法……百六丁
(十三)結論……百九丁
(十四)參考室……百十丁
(十五)新議案……百六十六丁

新體詩學

大和田建樹　著

槙園文庫

(一)　開題

新體詩ふる語は。今や誰しも口に熟し耳に慣れたる普通名詞となりて。明治辭書中に增加を與へし語數の一つたるは。疑ふべからず。其はじめはいつにて。誰が之を用ひ初めたるぞといふに。去んぬる明治十五年の頃。外山丶山。矢田部尚今。井上巽軒の三先達が。西詩の翻譯と新作の長篇とを合著して新體詩抄と名づけ。丸善をして出版せしめられしに起因せるは。是また明かふる事實ふり。其凡例に曰く。

均シク是レ志ヲ言フナリ。而シテ支那ニテハ之ヲ詩ト云ヒ。本邦ニテハ之ヲ歌ト云ヒ。未ダ歌ト詩トヲ總稱スルノ名アルヲ聞カズ。此書ニ載スル所ハ。詩ニアラズ歌ニアラズ。而シテ之ヲ詩ト云フハ。泰西ノ「ポエトリー」ト云フ語。即チ歌ト詩トヲ總稱スルノ名ニ當ツルノミ。古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ。

又曰く。

和歌ノ長キ者ハ其體或ハ五七。或ハ七五ナリ。而シテ此書ニ載スル所モ亦七五ナリ。七五ハ七五ト雖モ。古ノ法則ニ拘ハル者ニアラズ。且ツ夫レ此外種々ノ新體ヲ求メント欲ス。故ニ之ヲ新體ト稱スルナリ。

是ぞ新體詩の文字を説明せるものにて。爾來新體詩は其目的に於て流行しつゝ進歩しつゝ有るを見る。先達の開口唱道まことに厚謝すべきの甚しきものなり。

然れども。世にはその到る先をも確かめずして。人の群集の跡おひてぞろ〳〵と付きゆくもの多きが常ふれば。何の爲めに新體詩を作り。如何ふる方法にて之を作るべきかも知らずして。みだりに之を綴り之を翫びて。唯時好に後れざらん事をのみ勉むる人々も無しと限られず。新體詩の流行進歩もとより希望すべき事なれども。一歩を誤らば。チョボクレ節と爲り端唄調と爲り。野卑猥褻見るにも聞くにも堪へざるものと爲つて止まんとするは。歎かはしく厭ふべき次第ふらずや。

何故に斯かる誤解を來すべきぞといふに。是れ併しながら新體詩の事を學ぶべき書ふきが爲めのみ。余は新體の二字を以て文學上の光明と信ずると同時に。陣腐の二字をば更に文學上の暗黑と呼ぶ者ふれば。こゝに新體詩學を著はして。飽くまでも明治文學の區域を擴め。以て自由自在の新鮮空氣を同學諸君に呼吸せしめんと期するなり。

開題の終に臨んで。必ず讀者諸君に告げ置かねばならぬ事あり。此書名づけて新體詩學と曰ふ諸君既に知れり。然るに載する處の規則。舉ぐる處の作例。多くは過去のものに屬して新體の實を見ざるは何ぞや。是れ或は諸君の譏りと疑ひとを免かれ難き處ふるべければ。請ふ詳かに之を說かん。

世人常に曰ふ。我は明治社會に生活して明治社會の言語を用ふ。何ぞ古人の死文を學びて迂遠の事に暇を費やさんやと。いかにも一應は尤の論に似たれども。實は思はざるの甚しきのみ。よしや明治社會の言語を自由自在に使ふにもせよ。最初の未熟ふりし時。誰の言語をも模擬せずして發達せし理は有らざるべし。あらはにこそ分られ。父の物言ひを聞き覺え師匠の音聲を習ひ取りふどしつゝ。漸々に口上會話演說ふども出來るやうに發達し來りしや疑なし。文章とても同じ事にて。始より手本ふしには修業は出來まじ。其手本とするは明治の文章もとより適せりとは雖も。今人の書きたるものには謂はゆる玉石混合しつゝ。之に加ふるに愛憎の私情を以てし。容易に公平無私の心より可否を判斷するはむつかしき事なり。之に反して古人の文章は。後世に傳はるもの。多くは優等にて人口に膾炙するものゝみふるが上に。既に世を去りて明治の我々と利害をも毀譽をも競爭せざる人々ふれば。愛憎の公私のといふ事。毛頭あるべき筈もなく。全く優れるを優れるとして見るが故に。模範とすべきは古文に在る事勿論なるべし。唯その作者の時代をも辨へずして。古文とし言へば一圖に高く。今文とし言へば只管卑しく偏信するは。笑ふべきの甚しきこと。今更言ふまでも無きは誰も知る處ならん。

新體詩を學ぶも又この理ふり。今や雜誌に新聞に編輯に著述に。到るところ新體詩の聲を聞くが如くなれども。其中に就きて。規則を見出だし模範を得るものありやと問はれふば。先づむつかしきが多數ふりと答へて止まん外ふし。されば此くの如きものを標準として規則を示し。之を模範として文例を集めん

は。讀者諸君をして危險に陷らしむるのみならず。余が希望して止まざる理想中の新體詩に遠ざからしめん事。いよ〳〵甚しきを加ふるを見んのみ。

諸君も知らん。現在の謂はゆる古歌ふるものは。過去の謂はゆる新體詩なりし事を。果して然らば古歌の沿革と其作例とを研究し。既往の盛衰得失の跡を鑑みて以て。將來の勸戒に備へんこそ。余が理想中新體詩の擴張進歩を企圖する順路ふる事なも。併せて諸君の會得するあらん。

(二) 新體詩の歴史

新體詩の名は明治十五年の頃に起りし事。すでにいへり。古代の詩歌は其時其時の新體詩ふりし事。これまた前にいへり。されば新體詩ふる名は新らしけれども。其實は古代よりありて時世々々の沿革を經來りしものなる事も。明かふ

るべし。今こゝに其起原より始めて簡單に其大要を語らんとするふり。

紀貫之が古今集の序に。「千早振る神代には。歌の文字も定まらず。云々。素盞嗚尊よりぞ三十文字あまり一文字はよみける」といへるは。後世の如く五言七言の句法に必ず合はさねばならぬといふ類の。人造規則の無かりし時代を指したるなり。

此時代は紀元前に始まりて奈良の朝の頃までも續きたり。其一二例を示さば。

神武天皇兄猾を擊たせ給ひし時の御製に曰く。

うだの[三言]……(守陀にて大和の地名)

たかきに[四言]……(高城にの意にて小高き處を云ふ)

しぎわふける[六言]……(鴫を取るとてわふを張るを云ふ)

わがまつや[五言]……(我待つところのゝ意)

しぎはさやらず[七言]……(鴫は障り罹らずふり)

いすくはし言五……（くぢらの枕詞）
くぢらさやる言六……（鯨かゝれりの意）
こふみが言四……（前妻の事）
ふこはさば言五……（魚乞はゞふり）
たちそばのみの言七……（木の名ふるべし次の句の序詞）
なけくを言四……（長き肉をの意）
こきしひゐね言六……（許多の肉をへぎて與へよの意）
うはふりが言五……（後妻の古言）
なこはさば言五……（前に出づ）
いちさかきみの言七……（これも木の名にゝ次の句の序詞）
おほけくを言五……（大きふる肉をの意）
こきだひゐね言六……（前のこ。。。きしに同じ）

えゝしやこしや言七……（惡み詈る詞）
あゝしやこしや言七……（嘲り笑ふ詞）

日本武尊の伊勢の國にての御歌に曰く。

をはりに言四……（尾張にふり）
たゞにむかへる言七……（直に向へるなり）
をつのさきふる言七……（尾津の崎にて伊勢の地名）
ひとつまつあせを言八……（一つ松吾兄よの意）
ひとつまつ言五
ひとにありせば言七……（人に在りせばふり）
きぬきせましを言七……（衣着せましをふり）
たちはけましを言七……（太刀佩かせましをふり）
ひとつまつあせを

右の時代の間より。おのづから人々の好む句法定まり來りて。藤原奈良の頃に至りては。五言七言。五言七言と連ねゆく調べが長歌の定格と爲りたる如し。歌聖といはれし柿本人麿（藤原時代）山部赤人（奈良時代）などは。常に之を用ひたり。

萬葉集一の巻に。吉野宮に行幸のありし時。人麿のよめる歌に曰く。

やすみしゝ（枕詞）　わがおほきみの（我大君の）
きこしをす（聞し召す）　あめのしたに（天下に）
くにはしも（國は）　さはにあれども（多に有れども）
やまかはの（山川の）　きよきかふちと（清き河内の地として）
みこゝろを（枕詞）　よしぬのくにの（吉野の國の）
はふぢらふ（花散）　あきづのぬべに（蜻蛉野邊に）
みやばしら（宮柱）　ふとしきませば（太敷座せば）

もゝしきの（枕詞）　おほみやびとは（大宮人は）
ふねなべて（舟並べて）　あさかはわたり（朝川渡）
ふなぎほひ（舟競）　ゆふかはわたる（夕川渡）
このかはの（此川の如く）　たゆることなく（絶事無く）
このやまの（此山の如く）　いやたかゝらし（彌高からし）
いはゞしる（枕詞）　たぎのみやこは（瀧の皇居は）
みれど。あかぬかも（見れど飽かぬ哉）

同書三の巻に。葛飾の真間の手兒名が墓を過ぎて赤人のよめる歌に曰く。

いにしへに（古に）　ありけむひとの（在りけん人の）
しづはたの（倭文機の）　おびときかへて（帶解替）
ふせやたて（伏屋立）　つまどひしけむ（妻問しけん）
かつしかの（葛飾）　まゝのてこなが（真間手兒名）

おくつきは五言(奥墓は)　こゝとはきけど七言(此處とは聞けど)
まきのはや五言(眞木葉や)　しげりたるらむ七言(茂りたるらん)
まつがねや五言(松根や)　とほくひさしき七言(遠く久しき)
ことのみも五言(言のみも)　なのみもわれは七言(名のみも我は)
わすらえなくに七言(忘られざるに)

これらの句法は。古體長歌の格として明治の今日までも。保守的歌人の間に專ら行はるゝものなるを知るべし。但し五言の句を或は四言にも爲し。七言の句を或は六言にも爲して用ひ。其他臨時適宜に長短句を交へ用ふるは。例外として由の氣を含みて。將來の擴張時期を待ちつゝあるものなるが如し。今これを五七調の長歌時代と稱へて。前の句法未定の長歌時代と區別するふり。古文學者は常に此時代を以て長歌正格の時代と爲し。後世に至るまゝに次第々々に亂れゆくものゝふりと論ずれども。是は其標準を古にのみ取りて今を忘れたるものゝふれば。輕々しく同意は表しがたし。唯これを參考室に備へおきて。飽くまでも先祖の遺業。子孫我々の模範として研究し。時としては學べども之にのみ拘はらずして。ひたすら自由自在の區域を擴めんことを忘るべからざるなり。

次に音樂に合はせて謠ふ歌曲はじまる。謂はゆる神樂歌催馬樂風俗の類にて。桓武天皇遷都の後。さかんに行はれしを見るなり。抑も音樂に合はせて謠ふ歌曲として。上古には別種類あるに非ずして。我作りし歌を我適宜の音樂に合はせ。我適宜の節にて朗吟せしに止まれども。今や朝廷の御儀式に用ひらるゝ音樂は其曲譜を定め。歌詞をも精選する事となりたれば。謠ふ歌は節附に都合のよきやうに長短適宜につゞけゆく事となりて終に一種の歌曲體を成し。此に於て詠歌と歌曲と二つに分れしなり。而して詠歌の方はおごそかに句法を守り雅言を用ふれども。歌曲の方は句法に拘はらずして俗語を交へ字音を混じなど。

自由自在なりしかば。取りも直さず明治社會に新體詩の流行を見る如き有様を爲したり。其一二をあぐれば。催馬樂に曰く。

夏引の。白糸。七はかりあり。狹衣に。織りても着せん。ましめはなれよ。

（われは夏引のよき白糸を。衣七反分ほど織るだけ持てり。それにて御身が衣を織りて着すべければ。御身本妻に離れ給へよとなり。女より男にいひかけたるなり。）

かたくなに。ものいふ女かな。まし麻ぎぬも。わが妻の如く。袂ふく。清く肩よく。こくび和らかに。縫ひ着せめかも。

（自分勝手の事いふ女かふ。さりとて汝は。麻衣をも我本妻の如く手際よく縫ひて着する事の出來得べしやとなり。男の答へたるふり。）

風俗に曰く。

荒田に生ふる。富草の花。手に摘みれて。宮へ參らむ。ふかつたえ。

（末の句は詳ふらず）

これらの流行すると同時に。長歌も句法の沿革を來し。上古に五七調ふりしものの。今は七五調に續きやく勢と爲れり。其例は古今集ふる壬生忠岑の歌に。

吳竹の五言　世々のふること七言　なかりせば五言
伊香保の沼の　おもふこゝろを　いかにして
あはれむかしへ　人麿こそは　述ばへまし
身は下ながら　天つそらまで　ありきてふ
末の世までの　跡となし　うれしけれ
ことの葉を　きこえあげ

いまも仰せの
塵に繼げとや
つもれる言を
これを思へば
藥けがせる
雲に吠えけん
千々のふさけも
一つこゝろぞ
かくはあれども
近きまもりの
たれかは秋の
あざむき出でゝ

くだれるは
塵の身に
とはるらん
いにしへも
けだものゝ
こゝちして
おもほえず
ほこらしき
照るひかり
身ふりしを
來るかたに
御垣より

外のへ守る身の
なさ〳〵しくも
九かさねの
あらしの風も
今は野山に
春はかすみに
夏はうつせみ
秋はしぐれに
冬は霜にぞ
かゝるわびしき
つもれる年を
五つの六つに

御垣守
おもほえず
中にては
聞かざりき
ちかければ
たふびかれ
鳴き暮らし
袖を貸し
せめらるゝ
身ふがらに
しるせれば
ふりにけり

これに添はれる　わたくしの
老いの數さへ　やよければ
身はいやしくて　年たかき
ことの苦しさ　かくしつゝ
長柄の橋の　ながらへて
難波のうらに　立つふみの
波のしわにや　瀕ほれん
さすがに命　をしければ
越の國なる　しら山の
かしらは白く　ふりぬとも
音羽の瀧の　おとに聞く
老いず死ずの　くすりもが

君が八千代を
わかえつゝ見ん七言

とあるを讀まば。全篇の句法は猶五言に始まりて七言七言に終はる事の變はらざると共に。句切々々の七五。七五。と續く勢に變はりゆきたるを見るべし。而して語勢のやうゝ柔弱に冗長になりたる如きをも感ずべきふり。後世の謠曲淨瑠璃ふゞ何れも七五調ふるは。起原をこゝに發したること。讀者諸君も爭はずして了解せらるゝ處ならん。

藤原氏衰へて平氏源氏相ついで政權を握る世の中とふりし頃より。今樣といふ歌曲さかんに行はれたり。是は中古の初期に弘法大師の作れりと言ひ傳ふる。「いろは」歌の句法に依りて。七五七五。七五七五。と八句に綴りふしたるものふり。平家物語に祇王が歌ひしを載せて曰く。

君を始めて七言
見るときは五言

千代も經ぬべし七言
おまへの池ふる七言
つるこそ群れぬて七言

又佛御前の歌ひしに曰く。

佛もむかしは
我等もつひには
いづれも佛性
隔つるのみこそ

又同書ふる後德大寺實定が作に曰く。

ふるき都を
淺茅が原とぞ
月のひかりは

姫こまつ五言
龜をかに五言
あそぶめれ五言

凡夫なり
ほとけなり
具せる身を
かふしけれ

來て見れば
荒れにける
隈ふくて

秋風のみぞ　身にはしむ

以て其一斑を知るに足らん。抑も之を今樣と名づけしは。當世風の歌といふ意味にて。かの五七もしくは五に始まり七七に終る七五調の古體と區別して呼びたる稱ふれば。全く新體詩と異語同意の詞たりしなり。さらば何故に句數に制限ありて。それより長くは綴らざりしぞといふに。中古以來貴族社會に行はれたる唐樂の中に。越天樂といふ曲ありて。其譜と今樣の句數とが一分一厘も違はずして。うまく合奏せらるゝは。もと越天樂の譜に合はせて作り始めしものか。又は偶然に一致せしものかは知られど。とにかく此越天樂が今樣の制限を定めしに與かつて力ありしは。疑ふべからざる事實ふらん。もしかの越天樂の曲ありて而して後に。之に合はせんとて今樣の歌出で來しものなりとせば。明治社會に流行する。西洋の曲ありて我國の歌出で來るものと同じ關係にて。新體詩の區域を擴むるに音樂の力を借りたる好例は。古代にありと謂ふべ

きふり。是より進みて七五の句法を爲すものいよ〳〵増加し。遂に五言に起り七言に終らずして七言に起り五言に終るものを。今様體と總稱するにも至りしなり。かの七五調の長歌は間接に今様體の起原を爲し。この七五調の今様は直接に今様體の系圖をはじめたるものと謂ふべく。而して遂に今日の新體詩を誘導しつゝ有りしものゝ如し。

鎌倉幕府の時代に至り。平家物語義經記曽我物語ふどの文章出でゝ。半は散文の如く半は歌曲の如く。謂はゆる語るに口調よく聞くに面白きを主としたり。此文章の系統を承けて。後の歌曲は生まれたるなれば。時としては散文に近き文句を交へて。必ずしも七五調のみに限らざりしは。かの催馬樂今様の如く。終始謠ひつゝ音樂に合奏するものに非ずして。文章を朗讀するといふ精神これが先とふり。音律と拍子とは之を助くるまでの器械として用ひられしが故ふるべし。是また新體詩の針路を指揮しつゝ。自由自在の翼を得せしむべき一大勢力あるものふりけり。

其あらはれて歌曲の形を成したるものを宴曲と云ふ。酒宴の席ふどにて謠ふ曲といふ意味にて。鎌倉の末足利の初ごろに行はれたり。「春」といふ曲に曰く。

霞たふびく。雲井より。　春立ちけりふ。天の戸の。
明くる氣色も。のどかにて。　鶯さそひ。はるの風。
霞むとすれど。淡雪の。　下草はなほ。結ぼれて。
岩間の氷。とけやらず。　いかでか春の。越えつらん。
ふこその關の。あづまぢ。　……
……そよや。　あらまほしきは。梅が香を。
櫻の花に。にほはせて。　柳が枝に。さかせてしがな。
百千鳥。木づたへば。　己が羽風にも。亂れぬべき。
……　……ものをな。

誰におほせてか。……
やへ山吹。……
汀にふびく。池の面。
しひてや。手折らまし。
三月の永き。春日も。

是は大かた今様を長く續けたるが如き。七五調を本としたるものなれど。長短句を隨意に用ひたるは。……點を打ちたる處の缺句。または其他語數の過不足せる句に就きて見るを得べし。又「月」の曲に曰く。

更闌け夜閑かにして。
明月峽の。あかつき。
千里に月。明かふり。
宮漏まさに。長ければ。

啼く音も絶えせ。ざるらん。
紫ふかき。藤波。
とり〳〵にぞや。覺める。
折らしてや。かざゝましやふ。
猶あかふくに。暮らしつ。

清明たる。月の夜。
庾公が樓に。登れば。
殘月まどに。順ひて。
打つや砧の。萬聲。

千度寐覺の。床の上に。
片敷く袖にや。おきそはん。
秋琴綾く。調べて。
索々たる。絃の響き。
ふけては寒き。霜夜の。
瀧の水。氷むせんで。
月の出汐や。御津の濱。
波間にうかぶ。白妙の。
月は明石の。浦のすまひ。
問はず語りの。夢もげに。
いざ見にゆかん。更科や。
廣澤住の江。難波がた。

拂ひもあへぬ。露霜を。
月さえて。風秋ふり。
潭月に望む。のみふらし。
松の嵐も。かよひ來て。
月を候山に。送るなり。
流るゝ事をや。得ざるらん。
松の下枝を。洗ふ波の。
月や砂を。照らすらん。
真木の戸口の。月影。
忘れぬ節とや。ふりぬらん。
嫌捨山。清見が關。
蘆間にやどる。夜半の月。

仰げば清き。久方の。
雲の梯に。すみわたる。
月華門の。夕月夜。
うつろふ萩が。花ずり。
玉かと見ゆる。月影。
伏待の月。……

月のみやこは。九重の。
露臺の月の。有明。
秋の宮人の。袖の上に。
露もさふがら。色々の。
いざよひに。弓張。
おぼろに霞む。三日月。

右の曲に至りては。漢文風の語氣も多く交り來りて。長短句の用ひ方も前例よりは遙かに隨意の度の增したるを見る。是等の歌曲が今一歩を進めて。舞の手と伴ふひたるを曲舞(くせまい)といふ。足利の初期もつぱら行はれしものにて。謠曲の起原をふしたるは是なり。

されば其成立には幼時より進みて成人に入りたる沿革の順序あれど。文學上の沿革よりいへば。曲舞は謠曲の一部分。謠曲は曲舞に前後を加へて大成せしもの

のに外ならず。故に今こゝには別々に例をあげずして。謠曲中の歌として新體詩として味はるべきものを引き。之を宴曲の系統に繼がしめんとす。

抑も謠曲は能樂と共に足利時代に起り足利時代に成り足利時代に行はれたる歌曲なり。而して德川時代を透して衰へず。明治社會の光にあひて更に振はんとするは諸君も知る處ならん。其此くの如き大勢力を得たるは何ぞや。能樂を美術上に音樂上に論ずる事は。今こゝに要ふければ姑く措くとして。謠曲を文學上に見るのみにても。人を感動せしむるに足るものあればなるべし。中にも其全曲中の一小部を抜き出だし。世に「小うたひ」と名づけて酒席の一興に備ふる短篇のものには。十分新體詩として吟誦すべきもの多く。種類にも富みたれば。他の例よりはやゝ細かに之をあぐる事の必用なるべきを信ずるなり。

安宅に曰く。

然るに義經。弓馬の家に生まれ來て。命を頼朝に奉り。屍を西海の波に沈め。

山野海岸に。起き臥し明かす武士の。鎧の袖枕。かたしく隙も波の上。ある時は舟に浮び。風波に身を任せ。ある時は山脊の。馬蹄も見えぬ雪の内に。海少し有る夕波の。立ちくる音や須磨明石の。とかく三年の程もふく。敵を亡ぼし靡く世の。其忠勤もいたづらに。ふりはつる此身の。そも何といへる因果ぞや。げにや思ふ事。叶はねばこそ浮世ふれど。知れどもさすがなほ。思ひかへせば梓弓の。すぐふる人は苦しみて。讒臣はいやましに世にありて。遼遠東南の雲を起し。西北の雪霜に。せめられうもるうき身を。ことわり給ふべきふるに。たゞ世には。神も佛もましまさぬかや。恨めしのうき世や。あらうらめしのうき世や。

是は義經が末路の述懷を寫せるふり。一讀英雄の腸を斷たしむる感あるべし。

井筒に曰く。

名ばかりは。在原寺の跡舊りて。松は老いたる塚の草。これこそそれよ亡き跡の。一村ずゝきの穂に出づるは。いつの名殘ぶるらん。草茫々として。露しん〳〵と古塚の。まことふるかな古の。跡ふつかしきけしきかふ。

古寺のありさま自ら思ひやられて身にしむ心地すべし。

鵜飼に曰く。

しめる松明ふり立てゝ。藤の衣の玉だすき。鵜籠を開き取り出だし。馬つ巣おろし荒鵜ども。此河波にはつと放せば。面白の有樣や。底にも見ゆる篝火に。驚く魚を追ひまはし。かづきあげすくひあげ。ひまふく魚をくふ時は。罪も報いも後の世も。忘れはてゝ面白や。漲る水の淀ならば。生簀の鯉やのぼらん。玉島川にあらねども。小鮎さばしるせゞらぎに。かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の。燃えても影の暗くふるは。思ひ出でたり。月にないぬるかなしさよ。

忽に興至り忽に興盡く。變化あるを味ふべし。

百萬に曰く。

（前略）奈良の都を立ち出でゝ。歸り三笠山。佐保の川を打ちわたりて。山城に井手の里。玉水は名のみして。影うつす面かげ。あさましき姿なりけり。かくて月日を送る身の。羊の歩み隙の駒。足に任せて行く程に。都の西と聞えつる。嵯峨野の寺に參りつゝ。四方のけしきを詠むれば。花の浮木の龜山や。雲に流るゝ大井川。まことにうき世のさがふれや。盛すぎゆく山櫻。嵐の風松の尾。小倉の里の夕霞。立ちこそつゞけ小忌の袖。かざしぞ多き花衣。

貴賤群集する。此寺の法を尊き。

行方うしなひたる愛兒を尋ねて。奈良より嵯峨まで迷ひ來たる慈母の情を寫すと共に。其經過せし道すがらの地名を畫がき出だせるは妙筆ふらずや。其他極めて短きものにては。

花に馴れこし野の宮の。秋より後はいかふらん。

また。

釣瓶の水に影おちて。袂を月やのぼるらん。

ふどの如きものも。新體詩の參考室中に味ひのこすべきに非ざるふり。

此謠曲の系圖を繼きて、雅言を俗語に昔へ雅趣を俗意に移しつゝ。猶更に其仕組を增大にし。或は通俗を主とせしものは。慶長の頃より德川時代に至りて發達大成せし淨瑠璃長唄の類ふり。

又遙かに今樣の系統より出でゝ。之に加ふるに謠曲の分子を以てし。遂に長唄と相合したるものは琴唄ふり。其今樣體なるものは。露組に曰く。

其一

露といふも。草の名。　茗荷といふも。草の名。

富貴自在。德ありて。　冥加あらせ。給へや。

其二

春の花の。金玉。
柳花苑の。うぐひすは。

其三

月の前の。しらべは。
くもぬの。雁がね。

其四

長生殿の。うちには。
不老門の。まへには。

其五

弘徽殿の。ほそどのに。
朧月夜の。内侍のかみ。

和風樂に。柳花苑。
同じ曲を。さへづる。

夜寒を告ぐる。秋風。
琴柱におつる。こゑ〳〵。

春秋を。富めり。
月の影。おそし。

たゝずむは。誰々。
光る源氏の。大將。

其六

たそやこの。夜中に。
敲くとも。よも明けじ。

其七

七尺の。屏風も。
羅綾の。たもとも。

鎖いたる門を。敲くは。
宵の約束。ふければ。

をどらばなどか。越えざらん。
ひかばふどか。切れざらん。

又遠く催馬樂風俗の源流より來りて。時代々々の自然を失はざるものは。謂はゆる「はやりうた」にて。其足利時代のは狂言小歌とて今も其曲を遺せり。「春雨」に曰く。

春雨に。さすからかさの。柄もりして。腕まくりして。空見て。日はおじやるろ。しよぼとぬれたも。よいものを。かまへて干さいで。よい日にも。

「守治のさらし」に曰く。

宇治のさらしに。島に洲先に。立つ波をつけて。はま千鳥の。友よぶ聲は。ちり〳〵やちり〳〵。ちり〳〵やちり〳〵と。友よぶ處に。島陰よりも。潛の音が。からりころり。からりころりと。漕ぎ出だいて。釣するところに。釣つた處が。おもしろいとの。

徳川時代に起りたる端唄といふものふども。是等の系圖を承けたるが。遂に其用ひらるゝ場所につれつゝ。偏に猥褻卑俗の點にのみ流れはてたるは殘念ふり。

誰が作りて何時代に謠ひ初めたるものなるかは知れねど。兒童の間に行はれ。或は田舍人の口に傳はりたる歌曲。すなはち遊戯歌。手鞠歌。盆踊の歌。田植歌。舟歌の類ふどの自然無罪なるものを聞かば。かの催馬樂風俗と同種なるをも發見すべく。足利時代の小歌と同先祖なるをも理會すべきが多からん。果して然らば。新體詩の參考室に是等の童謠俚歌を入るゝ事の必用なるは勿

論ふるべし。徳川時代の泰平やゝ其象を現はし。從つて文學の隆盛を見るに至りしは元祿年間にありし事。諸君は知らん。此時謂はゆる國學和學ふるものも大に其光を放ち。中古以來の亂れたるを治め。一にも二にも萬葉集の古に復さんといふ論おこりぬ。此に於て。一たび七五調に變遷し來りし長歌も俄に上古の五七調に復し。言語まで趣向まで萬葉時代を模擬する事とふりしは。新體詩論者より見ては笑ふべく怪しむべきに似たれど。是も時勢の然らしむる處ふりしかは如何せん。之を名づけて。假に萬葉模擬長歌の時代と稱ふべし。

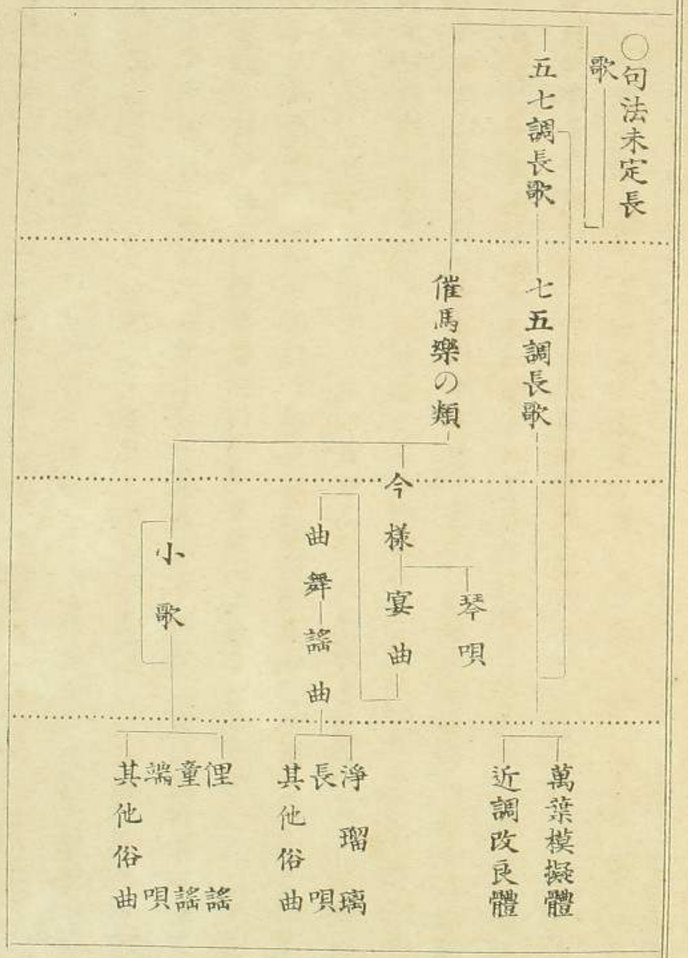
天保弘化の頃にあたり。海野遊翁といへる歌人いでゝ。長歌といへば必ず萬葉風の古言もてよむ習慣ふるを嘆き。之を改良せんとて。自身は近體すふはち古今集以後の詞もてよみいだせり。是また時勢のおのづから進み來れるをトするに足らん。

近年は神名川に辨玉といはれし僧ありて。長歌をもて名ありしが。つとめて新

事實新言語をよみこまんとせし跡の見ゆるは。また風潮の向ふ處を見るべし。維新後新學制の頒布せられてより。文部省音樂取調掛にては小學唱歌を作られ。式部寮雅樂所にては保育唱歌を起され。又宗教家にては讃美歌の翻譯成りなどしつゝ。或は古歌曲を折衷し。或は新歌曲を試作し。或は西洋歌曲を模擬翻案して。以て新體詩の一門を最初に開けるものゝ如し。

然れども是ふほ唱歌の一部門ふれば。新體詩の目的を滿足せしむるに足るものに非ず。今や之を作らんとて之を讀まんとて。希望を荷ふひつゝ雜誌に新聞にあらはれ出づるもの。引きも切らざる有樣ふり。諸君に語るに先づ其沿革の大要を以てして。既往の變遷得失を叙するは。未來の作者たり讀者たる諸君をして。將來の變遷得失を未然に勸戒せしめんが爲めふり。請ふ左に再びあげたる系圖に就きて。既に述べたる要目を記臆し置け。

奈良以前……平安朝……鎌倉足利……徳川時代



(三) 種類

詩歌の種類を名づくるに。支那にては五言。七言。古詩。律詩，絶句等の稱を以てし。又古詩をば歌。行。曲。吟ふゞゝ細別して稱ふる事もあり。西洋にては。常にリリック(我感情を謠ふを主とせし歌)エピック(作者が歷史家と爲りて記述せし歌)ドラマ(甲と乙との對話にふりたる歌)の三大區別もて稱ふるなり。我國古來の習慣は如何といふに左の如し。

發句……十七字より成る
短歌……三十一字より成る
旋頭歌……三十八字より成る
今様……四十八字より成る

長歌……句數に限ふし

以上は歌人の手に成るものとして分類せられたるふり。此外の歌曲に屬する催馬樂謠曲等の類は。何れも其成立せる曲の名を呼ぶのみにて。歌人文人の新作を受け込むが如き餘地を與へざりしかば別に其句法體裁等によりて文學上に之を分類せし名稱は有らざりき。近日世上にて呼ぶところの名稱を記して見れば左の如し。

新體詩……古格に拘はらざる長篇の總稱
唱歌……樂器に合はせて謠ふ歌曲の總稱。主としては小學校女學校等に用ひらるゝもの
軍歌……軍人の進行に謠ふべきが本にて。勇氣を振はしむるを主とせし歌。ことに幼少男子の書生社會に行はるるもの

讃美歌……耶蘇禮拜堂にて謠ふもの

以上は句格等の分類には非ずして。作者の目的と其用ひらるゝ場所とに依りて。稱へ馴らしたるのみ。

今あらたに之を分類するには。如何せば適當ならんといふに。先づ句格に依りて七五體五七體長短句體など稱へん事もつとも便利なるに似たり。次の章にて詳かに之を言はん。

(四) 句格

既に新體詩を興さんとす。もはや古格を墨守するに及ばざるは明かならん。然れども猥に意の向ふ處に任せて。惡句法を濫用し。口調にも讀者にも關係せざるが如きに至らば。歌にも詩にも文にもあらぬものと爲るべければ。あらかじめ其標準をば立て置かざるべからず。立て置けばとて其範圍外に少しも出づるふと云ふには非ず。飽くまでも。其歌句とふるべきや否やを。研究の上にも研究して。新體を出だすべきを謂ふなり。今こゝに出來得るだけの句格を列擧して。參考に備へんとす。左の如し。

五四……たがふらす。いとたけ。
　　つきのいろ。むしのね。
　　あらかふし。つれふや。
五五……おもしろの。ありさまや。
　　ゆふぐれの。あきのかぜ。
　　ふごりをし。くものいろ。
五六……はるかぜは。はふのうへに。
　　ちゝはゝは。たれとかたる。

五七……くにのため。すつるいのち。
……うぐひすの。きなくはるべは。
いつかまた。わすれぬやどを。
いざやきて。わがともとはん。

六四……くにのかたぞ。こひしき。
われとあそべ。はるかせ。
たにゝひゞき。のにみち。

六五……ひけやひけや。このくるま。
やふひおちて。かせさむし。
ひとはいづこ。ふかきよに。

六六……はるのいろは。そらにみちて。
たれにつけん。たびのこゝろ。

六七……きみのめぐみ。うろのごとく。
……いざうちつれ。のべにあそばん。
まつのあらし。まくらにおちて。
けふもふごり。つきこそそらに。

七五……ねぐらにかへる。やふがらす。
ひとむらさめの。あまやどり。
つきよりほかは。ともゝふし。

七六……かみはめぐみを。のべのくさに。
ながるゝはふを。いざすくはん。
このまをつたふ。やきのしづく。

七七……わがやのまへの。やふぎのこかげ。
そだてしきくは。いまこそつぼみ。

八四……アジアのうみの。ひがしのそらに。
……ともせやほたるよ。そのひを。
こひしふるさとの。おとづれ。
ゆふぐれしづかに。かたらん。

八五……あさひにかゞやく。ひのみはた。
いまはこれまでぞ。はなハねに。
つきにもはなにも。すてられて。

八六……あはれまつひとの。ふねはいづこ。
のぼらばたかねの。くもゝきりも。
うつくしきそらの。くものけしき。

八七……はゝふきわがやは。やみゆくこゝち。
かすみのひまより。みえゆくこずゑ。

八八……とりふきはふおち。はるいくばくぞ。
……まつこそありけれ。うめこそありけれ。
たて〳〵みづとり。そのかりそのかも。
ゆみをれやつきて。わがこゝをはりぬ。

右は古歌の文句を抜き出だせるもあり。又余が舊作もしくは新に綴り設けたるもあり。此くの如く余が作を例に引かんは。甚だ不遜嗚呼のわざなりとの譏りもあるべけれど。古歌の文句中には例を容易に見いだしがたきもあり。又一二句くらゐ抜き出だしても。意味の續きを了解しがたきものも多く。しかのみならず。この例を擧ぐる目的は。諸君と共に出來得るだけ新體を博く用ひんとするに在れば。謂はゆる議案として拙作を提出したるものと知るべし。而して此諸體句格を用ひんに。たとへば。

七……七……

七……七

七……七

七……七

五……五

七……七

八……七

などの如く。長短句を用ふるも有るべし。余は嘗て作り試みたる拙稿二三首を引きて。議案の説明に代へんとす。決して模範に掲げたるふどの精神と誤解せらるゝ勿れ。

家にいふん（全首三段の内前一段を引く）

いざやわれ（五）家にいふん（六）

いつも樂しき（七）わが家に（五）

母の膝に（六）ねむるちごの（六）

笑顔いざや（六）見にいふん（五）

熊と虎（全首三段の内中一段を引く）

あはれ虎よ（六）その虎（四）

誰かこゝに（六）とらへし（四）

月に吼ゆる（六）氣力は（四）

いまはいづこ（六）やよ虎（四）

涙の聲（全首三段の内前一段を引く）

夕日をかくす（七）旗手のなびき（七）

雲までひゞく(七)ときの聲(五)

その世のうらみ(七)のこるか今も(七)

あらしにさわぐ(七)かれすゝき(五)

(五) 段格

文章にては意味の一完結する處を名づけて段落といふ。長篇の詩歌にも此事あり。然れども詩歌は文章とちがひて。其第一段と第二段以下の各段とは同句格なるを常とすべきふり。或は一段が五五。七五。七七。七六。ふるに。二段は七七。七六。七七。七五。などのやうに變化するは。特別の場合として許さるゝ外は。好ましき事ならざるべし。中にも音樂に合はせて謠ふ曲に至りては。最も每段句格を一致せしめざるべからざるは勿論なり。

さても此段數を重ねて用ふるといふ事。我國の歌に古より有りしや如何といふに。神武天皇の長髓彥を討ち給はんとせし時の御製に。

一。みつ〳〵し。久米のこらが。粟生には。香韮ひともと。そねがもと。そねめつなぎて。討ちてし止まむ。

二。みつ〳〵し。久米のこらが。垣もとに。うゑしはじかみ。口ひゞく。われは忘れず。討ちてし止まむ。

三。神風の。伊勢の海の。大石に。這ひもとほろふ。したゞみの。いはひもとほり。討ちてし止まむ。

とあるは。三首ふりとも見れば見らるれど。同じ時に同じ感情を同調同句格によりてあらはし給ひしは。取りも直さず一首三段の御歌として見るを得べし。神樂歌催馬樂に至りては。段を重ねたるもの多けれど。大方は謠ふ節の段落を本として詞を當てはめたるものふれば。歌の意味に關しては。寧ろ儀式に止ま

りたるが如し。此後は全く段を分け段を重ぬる事絶えて。五七調七五調の古体長歌はいふに及ばず。今様宴曲謡曲淨瑠璃長唄端唄に至るまで其痕跡をも見ず。たゞ琴の組歌(前に例を出だしたるもの)に聊か之を見るが如きは。催馬樂の餘習を承けたるにや在らん。

支那の古詩に其例を求むれば。韻を換へて意味の轉化を知らしむる。是れ段ふりたるとへば。白氏文集なる上陽白髮人の詩に曰く。

上陽人。紅顏闇老白髮新。綠衣監使守宮門。一閉上陽多少春。
玄宗末歲初選入。入時十六今六十。
同時采擇百餘人。零落年深殘此身。
憶昔吞悲別親族。扶入車中不教哭。皆云入內便承恩。臉似芙蓉胸似玉。
未容君王得見面。已被楊妃遙側目。妒令潛配上陽宮。一生遂向空房宿。
秋夜長。秋夜無寐天不明。耿々殘燈背壁影。蕭々闇雨打窗聲。

春日遲。日遲獨坐天難暮。宮鶯百囀愁厭聞。梁燕雙栖老休妒。
鶯歸燕去長悄然。春往秋來不記年。唯向深宮望明月。東西四五百回圓。
(下略)

然れども是等の如き例は。韻をこそ蹈まね人麿赤人家持ふどの歌にも或は多少見るを得べくして。獨り唐詩をのみ引くには及ばぬが如くふれども。韻を換ふるといふ點に著るしき注意を誘起する事なれば。段格を度外視する我國歌人の作とはおのづから異なるべし。

西洋の詩には段數を重ねたる作の方多くして。一段ものゝ如きは殆んど稀に見る處ふり。長きは一冊をも二冊をも爲す作ありて。從つて段落の多きも自然の勢なり。概して言へば。西洋は長きを尊び東洋は短きを尊ぶが如し。然れども山吹の莖短しとて捨つべきに非ず。藤の花房長しとて何ぞ卑しむべきならんや。あながちに短きをのみ優れりとし。長きをのみ美ふりとするは極端論者の言のみ。

新體詩の興りし以來。段を重ねて長篇をふすもの多く。今は誰も珍しきものとせざるに至れり。例の不遜ふがら。段を重ねて作り試みたる拙作を議案に代へて。此章を終るべし。

冬の月

一。我はむかしの春の月
　我はきのふの秋の月
つねに變はらぬ影なれど
　世界はいつか老いにけり
夜ふ〳〵敲く窓の戸を
　明けてむかふる人もなし

二。白妙ひろき園のうち
　いづこに影を休らへん
そよ吹く風にさそはれて
　花に遊びしおぼろ夜は
あふるゝ情をうつたふる
　少女の歌も聞きつるに

三。馴れて訪ひよる高殿の
　あたりに琴の音も絶えて
ひとり時めく燈火の
　閨もるひかり細りゆく
はしる霰のうしろより

廊下をめぐるさびしさよ

四。堤の木の間あらはれて
　したしく向ふ水の面
いまは靄をかくしつゝ
　氷の底にねむれども
我こそまもれ來ん春の
　歌ををさむる汝が胸を

五。麓にいそぐ獵人を
　おくりしあとの谷の空
こだまに吠ゆるおほかみは

我ふぐさむる音樂か
落葉にうづむ棧を
　あらしと二人うち渡る

六。天きる雪とたゝかひし
　波に打たれて碎けても
恨みも敵も知らぬ身は
　光しづかに笑ふのみ
くまふき海よ我舞臺
　いかれる海よ我旅路

七。我は今宵の冬の月

我は來ん世の春の月
神代のまゝの影ふれど
世界はまたも若やがん
霞の衣につゝまれて
高嶺のどかに立たん時

(六) 詞の撰方

上に説き來りし句格と段格とは。外面にあらはれたる新體詩の形ふるを知るに足らん。而して之を組織する用語は如何と問はゞ。既に新體詩と號して明治世界に現出せし以上は。明治今日の普通言語を用ふべきは勿論ふりと。誰も答ふるふらん。然り〳〵余も此答には大きに同意するものふれども。甚だ困難なる

は。明治今日の普通言語とは。如何ふるものを指すかの標準に苦しむ事これなり。先づこゝに今日行はるゝ言語の種類を大別して見れば。

談話に用ふる言語の内に
方言……東京詞とか上方詞とか區別する如く。地方々々にて異ふるもの。
階級による詞……上等社會と下等社會とによりて異ふるもの。
職業による詞……書生とか兵士とかによりて多少異ふるもの。
性による詞……男女によりて異なるもの。

文章に用ふる言語の内に
和文的……古事記萬葉集を擬し伊勢源氏を擬するなど色々あれど。古文を模擬するものを總べて云ふ。
漢文直譯的……漢文に訓點つけて讀みたる如き語勢のものを

云ふ。わるくすれば文法上の過去未來も自他の別も無きが多し。

洋文直譯的……英獨佛蘭に拘はらず。すべて西洋文を譯讀せし如き語勢のものを云ふ。

折衷的……以上和漢洋三種の語勢を折衷して用ひたるもの。新聞の論說ふご多く之を用ふ。

通俗的……婦女子にも博く讀み易からしむるを目的とせしもの。徳川時代の草雙紙また今日の新聞雜報に多く之を用ふ。

書簡的……書簡に常に用ふる可被下奉存候の語勢を云ふ。

ふほ之を細別せば幾十種類にもふるべけれど。强ひて必要の問題にも非ざれば。こゝらにて止めつ。さても右の種類の內。談話に用ふる言語と文章に用ふる言語との兩立して。而して歌詩に適するは文章に用ふる言語。すふはち文語に

在ること。勿論なるべし。是れ言文一致の西洋とちがひて。我國語特有の慣例ふればなり。

然らば文語の內にては何種を撰ぶべきぞ。通俗的こそ新體詩の趣意を得たるものなれば。之を用ひん事もつとも希望すべきふれども。如何せん通俗的といふもの。未だ其標準を確定せざる今日ふれば。動もすれば卑俗に流れ不規律に陷るが如き。弊害を來さん恐れも無しといふべからず。唯その各種文語の內より。優れたるを採り美なるを集めて撰び用ふるの勝れるに如かざるふり。

其撰方は左の如し。

(イ)穩なるを撰べ　(ロ)簡潔ふるを撰べ

(ハ)優美ふるを撰べ　(ニ)分りにくきを避けよ

(ホ)口調あしきを避けよ　(ヘ)卑俗なるを避けよ

(ト)突然ふるを避けよ

(イ)穏かふるを撰べ……とは。無理ふらぬ言葉を使へといふ事なり。或る歌人の。「朝顔の花」「夕月の影」ふごいふは既に珍しからずとて。常に「花の朝顔」「月の夕影」ふごいふ詞をのみ使ふ癖ある如きを戒むべきなり。また唐詩の「夕陽春」を直譯して「夕日うすつく西の山の端」と使ひ。西洋語氣を擬して「月こそ躍れ」「山ぞ手を拍つ」ふごいふ如き。殊更に詞を新奇にして讀者の耳目を驚かすを以て快とする類は宜しからず。免に角に誰が見ても言語の上には無理ふく。ひたすら平穏ふるを主とすべきなり。此目的を妨害すべきものは(三)の處に說くを待て。

(ロ)簡潔ふるを撰べ……とは。ふるべく短き詞にて意味に不足なきものを用ひよといふ事ふり。「うちゐむ顔」といはんよりは「ゐがほ」といふ方優るべく。「父母の子をいつくしむ心」といはんよりは「父母の慈愛」といふ方優るべき類ふり。誰かの評に「秋のはじめになりぬれば。今年も半は過ぎにけり」は。詞を替へて同じ意味を繰返したるふれば簡潔ふらずと云ひしも。其理なきに非ず。和文的の流弊には隨分かくの如き語勢おほきを注意すべし。又洋文直譯的より來るものにも頗るくどき言方あるを覺ゆ。此くどき言方こそ簡潔の反對なるものと知るべし。

然れども。漢文直譯體の如き文法上の過去未來も無く。自他動詞の差別も無きに至りては。詞短くして簡單ふるには似たれど。我國語として意味を完備せざるものふれば。決して簡潔としては許しがたし。是また注意を要せざるべからず。

(ハ)優美ふるを撰べ……とは。ふるたけ美しく上品ふる詞を用ひよといふ事ふり。(美しく上品ふる言方の說明は前篇修辭學に出でたり)此目的を妨ぐるものは(ヘ)の處に說くを待て。

(ニ)分りにくきを避けよ……とは。或る一種一方の學者などふらでは。通じに

くきやうの詞を用ふふといふ事ふり。先づ其通じにくき詞の因つて來る源を尋ぬれば。左の二類に歸すべし。

和文的より來るもの……古言をのみ尊しと心得て。讀者にひろく通ずると否やとは不問に措くが如き弊あるを云ふ。

漢文直譯的より來るもの……動もすれば未だ我國の普通語とならぬ熟字を濫に用ひて。耳に發音のみを聞きては分りがたきをも顧みず。前後の國語と調和せざるをも省みざる如き弊あるを云ふ。

そも〳〵歌詩の散文より比較的に高尚ふるは。意味の優美高妙ふる點に在りて。用語のむつかしきが爲めには非ず。然るに之を誤解する人は。徒らに用語をむつかしくして物知らぬ輩に誇らんとす。謂ハゆる鬼の面を被つて小兒をおどかす類のみ。緋の衣を纏ひて愚夫愚婦を惑はす類のみ。迷へるの甚しきに非ずや。

(ホ)口調あしきを避けよ……とは。和漢洋いづれの種類より來れるを問はず。發音しにくゝ耳に障る詞をば用ふふといふ事なり。歌詩は意味を主とする事勿論ふれども。用語の流調活達ふらざる時は。讀者の耳に遮られて意味を其心中に傳達する能はざること。猶かの畫師の趣向は如何に好くとも。運筆の拙なき時は畫として見られざる如し。用語は詩歌の運筆ぶり。用語の撰擇に熟せずして詩歌が作らるゝふらば。運筆を習はずして畫師にふらるゝ筈ふり。豈此くの如き理あるべしやは。

(ヘ)卑俗なるを避けよ……とは。聞くも厭はしき下品の詞を用ふなといふ事ふり。たとへば「内のかゝあの言ふことにや」とか「大めしくらひの三太郎」とかいふ如き文句が。新體詩の中に在りしと聞かば。誰も其奇怪ふるを笑ふべけれど。未だ用語の標準定まらざる間は。是に似たること決して無しともいふべからず。既に古體の和歌大家にさへ。通俗と卑俗とを混同して。お三どんの居眠り

を歌によみ。馬士の居酒屋にて醉ひ倒れたるを三十一文字に綴り出でたるさへ有りといふ世の中ならずや。上下を通じて誰にでも分るは通俗ふり。下等社會にのみ行はれて教育ある以上の人に。厭ふべく嫌ふべき感情を伴起せしむるものは卑俗ふり。此別を混同してはならぬ。

(ト)突然なるを避けよ……とは。詞の釣合調和を好くせよといふ事ふり。和文的の文句の中に突然と漢語的の用語を交へ。極めて通俗の語氣の中に求めて高尚の雅言を一つ挿し入るゝ如きは。西洋料理に澤庵漬の一品を添へ。能舞臺に洋服の役者を加ふる類にて。讀者の惡感情を誘起するのみに止まるべければ注意せざるべからず。されば謠曲の文句には常に其調和を圖りしと見えて。西王母には。

花も醉へるや盃の。手まづ遮る曲水の宴かや御河の水に。戯むれ戯むるゝ手弱女の。袖も裳裾もたなびきたふびく。雲の花鳥春風に和しつゝ。雲路に

うつれば。王母も伴ふひ舉ぢのぼる。

と云へり。曲水といひ王母といひ。字音の詞を使へる釣合を取らん爲めに。春風に和しつゝの句を置きたるものなるべし。また田村に。

いかに鬼神もたしかに聞け。昔もさるためしあり。千方といひし逆臣に仕へし鬼も。王威を背きし天罰にて。千方を捨つれば忽ち亡び失せしぞかし。

とあるなどをも思ふべし。然れども同じ漢語より來れる詞の内にも。菊蝶琵琶烏帽子の如く。既に我國語かと思はるゝ程調和したる詞は。固より突然を嫌ふべくもあらず。また突然といふ感じも起るまじければ例外ふり。今や支那よりも西洋よりも其國語を頻々輸入し來り。我國語は好んで之を受け得らるゝだけは受け込まんとする時節なれば。今日突然と名づけて怪しむものも。明日は調和して固有の國語かと思はるゝに至らんは當然なり。然れども輕々しく突然の文字を看過して。歌詩の體面に傷つけんは苦々しき事ぞかし。況んや歌詩には

用語を撰ぶが必要ふるをや。日用品の如く便利にさへあらば外國品でもかまはざるものに非ざるをや。

（七）　意匠の工夫

余は先年畫の展覽會を見に行きし事あり。筆力の巧拙等は論題外として。先づ其趣向の如何を調べて見たるに。一方には花鳥山水人物より觀音道成寺に至るまで。百千の紙面に筆者の替はりたるといふのみにて。どこが其畫師の意匠を費やしたる處ふりや。何くが其人の特點を認むべき趣向なりや。たゞ〳〵去年も今年も畫といふは同ドものかなどの感じを起されし類いくらありしか。數へもつくすべからず。是れ果して美術の目的ふりや。之を見て愛し之を購ひて賞する人は。日と共に世と共に新たにふりつゝ止まざるに。其愛賞せらるべき

美術のみ人に背きて一歩をも進めざるは。あに衰運の前兆ならずやと。ひそかに思ひし事ありき。

又一方を見れば。新案をもて滿たさんとするが如く。是まで畫題としてあらはれざりしものゝ揭出せられしこそうれしけれ。然れども題いかに新らしくとも。意匠いかに珍らしくとも。唯あたらしめづらしとのみにて。美術として珍重せらるゝに足るものふりや。畫題として愛賞せらるゝ性質のものふりやを研究せざる如きは勿論不可ふり。今かの謂はゆる新案ふるものゝ二三をいはゞ。下婢臺處にて釜の下を焚きつくる圖。下宿屋の二階に破ゲット古枕ふどの散亂せる圖。神葬祭を送る圖。ふどの類ポンチ畫鳥羽畫または小說の挿畫などには或は適すべけれど。畫題として美術品の意匠として。持出だすべきものならぬは。諸君も同意せらるゝふらん。

新體詩にも此事あり。たゞ句格段格と用語とが新体をふしたるのみにて。趣向

は依然たる人麿赤人以來の舊體にて變化を見ざる作の如きは。かの百人千人同意匠同圖案の楊柳觀音道成寺亂拍子の流ふらずや。又たゞ新案をのみ立てんとして。乞食の喧嘩。裸體の美人。などを題とし趣向とする如きは。かの一時看客の笑を買ふに足る臺所下宿屋の眞景と何ぞ撰ばん。新體詩は何くまでも詩たり歌たる資格を存すべきふり。かゝる意匠は用ふる處ふきなり。

右二つの弊は何れも掃はざるべからざる中にも。後の方は苟も詩歌の作者たらんと志すものゝ誤る場合は少ふかるべけれど。前の方は堂々たる大家と呼ばるる人々の中にも。常に之を掃はんとする勇氣に乏しきが多ければ。ねんごろに反復注意せざるべからず。

左に富士の山をよめる長歌を並べあげて。其特點は各その間に如何程づゝあるかを感ぜしめんとす。

萬葉集山部赤人の歌に。

天地の。わかれし時ゆ。
神さびて。高くたふとき。
駿河なる。富士の高嶺を。
天の原。ふりさけ見れば。
渡る日の。影もかくろひ。
照る月の。光りも見えず。
白雲も。いゆきはゞかり。
時じくぞ。雪はふりける。
かたりつぎ。言ひつがゆかむ。
富士の高嶺は。

同集よみ人しらずの歌に。

ふまよみの。甲斐の國。
うちよする。駿河の國と。
こちごちの。國のみふかゆ。
出で立てる。富士の高嶺は。
天雲も。いゆきはゞかり。
飛ぶ鳥も。飛びものぼらず。
もゆる火を。雪もて消ち。
降る雪を。火もて消ちつゝ。
言ひも得ず。名づけも知らず。
靈しくも。います神かも。
せの海と。名づけて有るも。
その山の。つゝめる海ぞ。

富士河と。人のわたるも。
日の本の。やまとの國の。
寶とも。ふれる山かも。
見れど飽かぬかも。

加茂眞淵の歌に。(以下は徳川時代)
磯まより。そがひに見ゆる。
狹きかも。ふりさけ見れば。
低きかも。天の原ふる。
風のまに。横ほる雲に。
相模嶺の。峰も雨ふり。
六月の。照る日の空に。
常夏に。雪ぞふりける。

その山の。水のたぎちぞ。
鎭めとも。います神かも。
駿河ふる。富士の高嶺は。

駿河の海。沖つ波路は。
相模嶺の。八重山峰は。
富士の嶺の。麓を出でゝ。
駿河の海。沖もかくろひ。
時のまに。神も鳴りぬけど。
顏はれて。曇るともふく。
富士の高嶺は。

本居宣長の歌に。(畫に題せるなり)
あやに〳〵。高く尊く。
現世の。神とも神と。
高山を。小田のつむれと。
櫃の實の。ひとりぬけでゝ。
天ぞゝり。そゝり立たせり。
ふりさけて。見し人こそは。
奇はしき事は知るらめ。
いまだ見ぬ。人はかつ〴〵。
此かたを。見てもしぬばね。
くすはしきこと。

栗田土滿の歌に。
奇はしき。山は富士の嶺。
たゝなづく。四方の村山。
足もとの。麓にふして。
青雲の。棚引く空に。
其山を。たゞに正月に。
誠しか。高くたふとく。
鳴神の。音のみきゝて。
月草の。うつし書きたる。
此山の。高くたふとく。

うちよする。駿河の國と。
國はしも。異にあれども。
村山の。うへにぬけでゝ。
富士の嶺は。奇しき山か。
天の原。かすみ立ちこめ。
夏の日も。消ゆる時ふく。
もみぢ葉の。秋に至れば。
白雲の。八重雲のうへに。
いにしへに。いひける如く。
遠からず見ゆ。

霰ふり。遠つあふみと。
村山は。へふりてあれど。
天ぞゝり。高く見えたる。
み冬つき。春さりくれば。
時鳥。來ふく五月の。
白雲の。ふりてつもれり。
麓べは。霧たちわたり。
此山を。ふりさけ見れば。
天地の。あひ去る事も。

いづれも萬葉を祖述して布演せるに過ぎざるを感ずべし。以上の歌を讀みて是までの歌人が古歌の口うつしを主とせし弊を思ひ知ると同時に。新體詩は此く

の如く異口同音的の物なるまゞきをも悟るべきなり。橘曙覽といへる歌人の隨筆「ぬろりばふし」にも。既に歌題の狹くなりたる事を嘆じて曰く。

小澤蘆庵翁の歌に。いにしへは大根はじかみ韮なすび。瓜のたぐひも歌によみけり。といへるは。歌をむげに狹く取りふし。古き集どもに例あるものゝ外には。題もたやすくはものせず。ふべて海月ふす筋も骨も無きものによみそこふひ來れるわろぐせを。看破せられたるものにぞあるべき。誠に中頃よりこふた。歌は詞艶に姿ふつかしく。たけをあらせ幽玄にゝむべしと。ひたぶるに教へたてゝ。かのよき女の惱める處ありといふ風情のみをよき事に心得。執するがあまりのはてゝは。諺に謂はゆる正月詞といふものゝやうにいつも定まりて。早春には。朝日のどかに。霞たふびく。歳暮には。よする年波。春ぞまたるゝ。花には。雨のめぐみ。家づとに折る。月に。くまなき影。雪に。あとつけわぶる。ふどやうの詞の外には。世に歌詞

はふきものゝ如くにふり。百人が百人。一昨年も去年も今年も。同じ事をのみいひふらぶる事のあさましさよ。近き頃廣瀬旭莊といふ人が。享保元禄の頃の詩人の琴柱に膠すといふやうふる風體を嘲りて。白雲明月句。多〻於魚卵繫。といひたりしも。蘆庵翁のいきどほりにひとしき心ばへと見えたり。云々。

一讀もつて無氣力歌人の肝を冷やすに足るべし。既に生活せる作者が意匠を構へて生活せる讀者を感動せしめんとする詩歌をして。死物も同樣の死題枯趣向を反射せしめんとするは抑も何の意ぞや。思はざる可からざるふり。

今こゝに新作の趣向を考ふるに當り。必要の箇條をいさゝか示すべし。その第一は。模擬といふ事を離れて唯我思想感情をあらはすを主とすべし。同じく月を見るにも。國學者は「あはぎが原の波間より」と直に神代紀に想像を馳せ。武士は「いつか散の上に照るやと」と慷慨おく能はざる情を洩らし。おの〳〵其境界

によりて趣を異にするは事實なり。天地は開闢の天地ふれども。人間は人麿赤人時代の人間にあらず。古体詩歌の模擬は甚だ忌むべく厭ふべきの極ふり。小兒は何れも獨樂を廻し凧を揚げ。昔話を聞き唱歌を謠ふを以て無上の快樂とするものなれども。大人は其樂しむところ各異なり。さらば小兒の作る新体詩も大人の作る新体詩も。同一轍の感情もて滿たさるまじきは論なからん。また以て小兒が大人の詩歌を模擬する事の。必ずしも當るまじきを證するものなり。模擬の意匠上に嫌ふべき此くの如し。中にも既往に屬する死題枯趣向のいつまでも繼續すべきを特に憂ひて寛假せざるは。今日の有樣止むを得ざるのみ。

第二は。變化あらしむべし。たとへば旅行する人の身に取りて見よ。行けども行けども同じく枯野の平原にて。川もふく山もふく。海も見えねば里も來らぬ處を過ぐるとせば。遂には心倦み神疲れて旅路の面白からぬを感ずるに至るべし。是れ景色の變化なきが致すところにて。詩歌文章に於ける讀者の退屈も。此

くの如きものあるふり。之に反して。紅葉あやおる絶壁を下れば玉みなぎらす急流あり。青山むかふれば白雲おくり。海かと思へば松原つゞきて。忽に目先のかはる風光を眺望しつゝ走りゆく瀛車の旅行は。其變幻の千態萬狀なるに心奪はれて。路の長きも時間の長きも覺えざるべし。是れまた詩歌文章に於ける作者の手段も。此くの如きものあるなり。

然るに古體の長歌を學ぶものい。上に出だせる富士の歌の例の如く。終始同じやうの事を長々といひつゞくるのみにて。謂はゆる「かけまくもあやにかしこき」に始まりて「かしこきろかも」に終る類のものならでは多く得難きは如何ぞや。この變化に熟せんとするには。支那の詩をも西洋の詩をも讀み馴らさば。おのづから得る處もあるべし。我國のものにても謠曲ふどは。さすが大仕掛の事なれば。或は舟辨慶の如く。靜の愁傷を盡す間もふく。知盛の幽靈を出だして海上激戰のさまを畫き。或は蟬丸の如く。一たびは姉宮蟬丸再會の御歡を盡し。忽にして離別の御悲を叙するふど。變化の妙用を極めたるもあり。どにかくに誰かの言ひし如く。波もふく趣もなき平面の湖水にふらぬやうに。心を用ひんことを忘るべからず。

第三は。ふるたけ博く新題を用ひんとすべし。是まで和歌によむべき材料といへば。花は。

梅　櫻　桃　李　梨　山吹　藤　躑躅　菜花　堇　牡丹　杜若　卯花
花橘　瞿麥　百合　夕顔　萩　薄　女郎花　藤袴　朝顔　月草　葛
菊

などに限りて其他には及ぼさんともせざるが歌人の習慣ふりき。然れども花の愛すべきもの豈これのみに止まらんや。野覆盆子の花の淡泊なるも。雪の下の涼しげふるも。又すつべきものふらんや。畫師の筆には既に入れり。新體詩家の採集袋は是等の草陰に分け入らん事を欲するなり。

須磨明石の月影は古人すでに詠ゞ盡せり。吉野龍田の花紅葉は先達すでに吟ド盡せり。殆んど又筆の入れやうも無き程ふるべし。然るに幸にして古人の足跡を入れられざる第二の須磨明石ありとせんか。それこそ我々新體詩人の領し得べき屈竟の地ふれば。我より古を爲して名作と共に名所たらしめんこと。愉快限ふきわざふらずや。山陽の筆これを傳へて豊前の耶馬溪天下に知られ。柳北の文新聞に出でゝ小向の梅林府下に鳴りたる例も近くにあるものを。鶴岡の静の舞。安宅の關の辨慶の杖。歴史上の名高き物語は。大方名文名歌に網羅せられて遺すなし。然れども猶餘地を與ふるは。櫻田の雪上野の嵐。維新史の上にも隨分望を屬すべきふり。況んや之を外國に探らば。我國語もて反射せらるべきもの無量ふらん。起てよ〳〵新詩體家。材料は滿ちたり新題ば富みたり。何ぞ試みもせずして古人に奪ひ盡されしとの言をば爲す。

第四は。好んで新空氣を吸取せよ。古來歌人の吸取しつゝ有りし他界の空氣はといはゞ。白氏等の詩句と經文の文句とを題にして。其小部分を譯述せしくらぬに止まれり。新體詩興りてよりは。西洋の詩を譯せしもの唐詩を翻せしもの續々と出で。其風體を學び其精神を寫したるものも從つて多きを加へぬ。是れ新空氣の我文學界に壓入せんとして。其間隙を見出だしつゝ有るものふり。吸取せよ〳〵。我國の歌に微妙の優點あると同時に。彼國の詩には拔群の長處ある事を忘るべからず。我を捨てゝ彼をのみ取るは偏見ふれども。我ある上に彼をも用ふるは其れだけ文學界の區域を擴むるものふり。況んや長篇偉作は彼の特有たるは爭ふ可からざれば。之を移して我國に栽ゑ。之に培ひ之に水かひつゝ。以て東洋の花たらしめん事。もつとも望むべき業ふるべし。日本の白居易は既に功を奏して地下に眠れり。日本のミルトン「失樂園」を石山寺に草せんこと何れの日ぞや。讀者は盛に新空氣中に泳游しつゝ有るに。作者は静に舊天地間に枕を高うせんこと。誰か之を是ふりと言はん。

(八)　裝詞の種類

古より用ひ來れる裝詞に。

(一)いひかけ　(二)緣語　(三)序詞

(四)枕詞

の四種あり。中にも枕詞は多く古體(特に萬葉模擬)の長歌に用ひられ。いひかけ緣語は著るしく謠曲にあらはれたり。今これらのをば依然として新體詩の舞臺に現出せしむべきものゝふりや否や。是れ既に我國語特有のいひかたなりとすれば。もとより放逐すべき理由もあらず。讀者の許すかぎり用方の無理ふらぬ限は。其可否を撰び用ひて其愛嬌を添へんに妨なかるべきなり。唯其いひかたをのみ面白くして讀者を眩惑せしめんとし。精神を忘れて虛飾にのみ走る如きに至つては言外ふるべし。先づ其四種のいひかたを示さば。

(一)いひかけ……とは。一語に二意を含ましむるものを云ふ。「大江山いくの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」といへば。行くと幾野とを兼ね。蹈みと文とを兼ぬるが如し。是には三つの種類あり。第一に形を變へざるもの。第二に上下の繋ぎに置くもの。第三に同音を重ねいふもの。是ふり。

第一に形を變へざるものとは。いひかけを用ふる爲めに詞の表面の動かぬをいふ。たとへば。

イ。世を今さらにあき(飽。秋)はてぬとか。

ロ。我身よにふるながめ(眺。長雨)せしまに。

ハ。ゆき(雪。行)のまに〳〵あとは尋ねん。

ニ。都をば霞と共に立ち(人の出立する。霞の立つと)しかど。

の如く。表面にあらはれたる一意をのみ持ちたりとせんも。文法上さらに差支

ふき類ふり。

第二に上下の繋ぎに置くものとは。上より言ひ來りたる詞と。下に言はんとする詞と同音ふるを合せ用ひて。兩方の用を勤めしむるをいふ。たとへば。

イ。天ぎる雲の(降)古枝をも。

ロ。さては疑ひ(不有)嵐の音に。

ハ。人(待)松虫の音に立てゝ。

ニ。奥は(暗)鞍馬の山道の。

ホ。心(盡)筑紫のはてにある。

ヘ。藥の名をも(聞)菊の水。

の類。之を文法上の平語に直す時は。

イ。雪降りつもる古枝をも。

ロ。疑もあらぬ嵐の音に。

ハ。人待ちてなく松虫の。

ニ。奥はくらき鞍馬の山路の。

ホ。心盡しゝ筑紫のはての。

ヘ。藥の名を聞く菊の水。

などいはでは叶ふべからず。今これを一語にて簡略風雅に兼ねしむること。いやみふく自然にさへ用ふる時は。實に面白きいひかたと爲るべし。

第三に同音を重ねいふものとは。上より言ひ來りたる詞と。下に言はんとする詞と同音ふるを重ね用ひて。口調をおもしろくするをいふ。たとへば。

イ。柴の庵のしば〳〵も。

ロ。粟津の原のあはれ世を。

ハ。越の白山知らねども。

ニ。浮き立つ雲の憂き世かな。

ホ。海士小舟あまりひまふき。

へ。かみは加茂川しもは志ら川。

の類なり。これもいやみふく自然ふらん事を要すべし。

(二)縁語……とは句中の詞に縁ある文字を特別に置くを云ふ。たとへば。

イ。旅衣末はるゞゝの都路を。けふ思ひたつ浦の波。(高砂)

ロ。見るまゝに露ぞこぼるゝおくれにし。心も知らぬ撫子の花。(後拾遺集)

ハ。月は一つ影は二つ。滿つ(三)汐の夜る(四)の車に月を載せて。うしとも思はぬ家路かふや。(松風)

ニ。花見車の八重一重。見え(三重)て櫻の色々に。(右近)

の類にて。此内イの例は。旅情をのべんとて旅衣といひたるより。衣に縁ある「張る」「裁つ」「裏」などの文字を。「遥」「立つ」「浦」の詞に含ませていへるふり。是は常に

いひかけの第一種を借り用ふる事なり。

ロの例は。愛兒を撫子の花に比して言へるにつきて。涙の事を花に縁故ある露。の文字もていひかへたるふり。ハニの例は。數字をふらべて面白くいひなしたるまでなり。

以上縁語に三種ある内。イとハニとの例は謠曲ふど常に好みて用ひし事ふれど。いかにも下品に聞えて新體詩中には列席をもるしがたきが如し。唯ロの例のみ自然の用法を得は詩中の花と爲りて輝くべし。

(三)序詞……とは。主たる文句を呼び起す爲めに。他の文句を冠らして裝とするを云ふ。是に三種あり。第一に比喩を用ふるもの。第二にいひかけの第二種を用ふるもの。第三にいひかけの第三種を用ふるもの。これなり。

第一に比喩を用ふるものとは。たとへば。

イ。蘆鴨の羽風になびく浮草の以上序詞さだめなき世を誰か頼まん。(新古今集)

ロ。思ひ出づる折りたく柴の夕煙（以上序詞）むせぶもうれし忘れがたみに。（同書）

ハ。今はた賤が繰る糸の（以上序詞）長き命のつれなさを。（安達原）

の如く。眼前の事物に就きて比喩の前句を置き。感情を強からしむる方法ふり。たゞ縁故もふく眼前にもあらぬ事物をわざ〳〵持ち來りて。序詞に用ふるふごは尤も禁ぜざるべからず。

第二にいひかけの第二種を用ふるものとは。たとへば。

イ。吹くや嵐の（以上序詞）（多）。大井山。「捨つる身に無き（以上序詞）（友）伴の里。」今ぞうき世を（以上序詞）（離）はなれ坂。」くだす筏の（以上序詞）（板）板鼻や。佐野のわたりに着きにけり。（鉢木）

ロ。波路はるかに行く舟の（以上序詞）（櫂）かい。いづの浦に着きにけり。東雲はやく明けもけば。淺茅色づく有乳山。氣比の海。宮居久しき神垣や。「松の（三字序詞）

（木の芽）きのめ山。」なほやくさきに見えたるは。「杣山人の（以上序詞）（板取）い。などり。」山名 川瀬の水の（以上序詞）（淺）あさうづ地名や。末は三國の湊ふる。蘆の篠原ふみよせて。靡く嵐の烈しきは。「花の（三字序詞）（仇）安宅に着きにけり。（安宅）

ハ。梓弓押して（以上序詞）（張）春雨けふ降りぬ明日さへ降らば若菜つみてん。（古今集）

ニ。風さむみ伊勢の濱荻わけもけば「衣（序詞）（借）雁金ふみになくふり。（新古今集）

の如く。特別に他の文句を前に置きて裝飾となす方法ふり。彼いひかけの第二種をば用ふれども。それと全く同じからぬ點は。彼いひかけは上下の詞。たとへば「雪の降る」と「古枝」との二句を。「ふる」の詞にて一つに結びつくるものなれば。上の詞の「雪の降る」も下の詞の「古枝」も共に文面に必要の文字なれども。此序詞

は「伴の里」をいはんために殊更に「捨つる身に無き」を置き。「春雨」をいはんために態々「梓弓押して」を置くの相違にあり。固より此序詞にも。「波路はるかに行く舟の」の如く本文を直に用ふる事もあり。又「松の木のめ山」の如く形容詞のやうに其實景を直に序とする事も常なれど。本體は下句に就きて序ふる上句の添はりたるに在るふり。

第三にいひかけの第三種を用ふるものとは。前に出だしたる例の如く。「柴の庵のしば〳〵も」「粟津の原のあはれ世を」ふどのいひかたにて。上の詞の「柴の庵の」「粟津の原の」ふどが本文ならばいひかけの第三種と心得べく。又特更に同音を重ねんとて態々置きたる句ふらば序詞と心得べき事。前の第二の例に同じきふり。

(四)枕詞……とは。五言の句に置くべき序詞にて。古來用格の制限を一定せしものを云ふ。故に序詞第一種(比喩的)に屬するものには。

イ。菅の根の……(長き春日)
ロ。春草の……(しげき思ひ)
ハ。花すゝき……(ほに出だすべき)
ニ。行水の……(早くの世より)
ホ。朝日かげ……(にほへる君)

の類あり。第二種(二意兼用)に屬するものには。

イ。梓弓……(張)春
ロ。海士小舟……(泊)初瀬
ハ。春の田を……(耕)かへすゞも
ニ。呉竹の……(節)伏見の里
ホ。燒太刀の……(鞘)さやの中山

の類あり。第三種(同音重用)に屬するものには。

イ。稲舟の……いなにはあらず
ロ。岩清水……いはで心に
は。花がつみ……かつ見る
ニ。かへる山……かへるゝも
ホ。うちよする……駿河

の類あり。以て其序詞と本は一つふるを知るべし。此外に普通の形容詞が定格と爲りて枕詞の名を詞たるものあり。たとへば。

イ。草枕……旅
ロ。鷲の住む……筑波の山
ハ。蓋が散る……難波
ニ。露霜の……秋
ホ。み雪ふる……冬

の類なり。然れども是等は枕詞として定格を立つる程の價値も無ければ。どうでもよき事とすべし。

さて此枕詞は新體詩に用ふべきか如何といふに。五七調のものには裝飾として稀に用ひんも然るべけれど。既に古來何千萬人の歌よみが使ひふるしたるものを。今我々が洗濯して着用せしとて。面白くもあるまじければ。先づは古歌の裝飾として床の間に仕舞ひおく方よかるべし。況んや七五調其他のものには用ふる場所も無ければ廢物たるべき事勿論ふり。

以上の諸例ともに用法の可否を判定し。讀者をして虛飾ふりいやみふりとの惡感情を起さしめざらん事に。くれ〳〵も注意せざるべからず。たゞ〳〵自然の勢に任せて。知らず〳〵の間に裝を爲したる如き手段こそ望ましけれ。

(九) 文法の變格

文法は我言語を正しく發音し。我文章を正しく書き綴る法則ふり。詩ふりとて歌ふりとて之に違背せん道理あるべしや。たゞ詩歌には普通とかはりて珍しき言方を許す場合は散文よりも多きのみ。

先づ其第一は倒句を多く使ふ事なり。たとへば。

イ。風……が……雪……を……掃ふ。

ロ。書生……が……詩……を……吟ず。

といへば普通の言方にて正句ふるを。此順序を換へて同じ意味に。

甲。風……が……掃ふ……雪……を。

書生……が……吟ず……詩……を。

乙。雪……を……風……が……掃ふ。

詩……を……書生……が……吟ず。

丙。雪……を……掃ふ……風……が。

詩……を……吟ず……書生……が。

丁。掃ふ……風……が……雪……を。

吟ず……書生……が……詩……を。

戊。掃ふ……雪……を……風……が。

吟ず……詩……を……書生……が。

など種々の言方を爲すを云ふ。是れもとより力ある詞を前に置き。又は口調を助くる爲めには。止むを得ざるのみか。最も必要の場合おほかるべきふり。今なほ右の例を確かめしめんために。歌句とふして對照せば左の如し。

甲。あらし……ぞ……誘ふ……峰のもみぢ葉

（風……が……掃ふ……雪……を）

乙。もみぢ葉……を……風……こそ……誘へ

（雪……を……風……が……掃ふ）

丙。霞……吹き解く…春の山風
（雪……を……掃ふ……風……が）
丁。たゝくか…月……は……柴の庵……を
（掃ふ……風……が……雪……を）
戊。よするよ…花……を……池のさゞ波
（掃ふ……雪……を……風……が）

其第二は略句を多く使ふ事なり。たとへば。

イ。日は山にのぼり鳥は野に歌ふ。
ロ。けふも蝶と遊び友と戯むる。

といへば普通の言方にて正句なるを。動詞を略して。

イ。日は山に鳥は野に。
ロ。けふも胡蝶と我友と。

ふゞの如く用ふるを云ふ。古歌にも。

君が代は千代に八千代にさゞれ石の
いはほとなりて苔のむすまで（紫エマシマセ）

こぞの春ちりにし花も咲きにけり
あはれ別れのかゝらましかば（ウレシカルベキニ）

とあるを以て其一例を知るに足らん。是は言はずしてもそれと知らるゝ詞を略して。餘情を長からしむる方法なり。

其第三は歌に限る特例を用ふる事ふり。たとへば文法上「こそ」の係は「けれ」「しけれ」と結ぶべき定格なるを。萬葉集の歌に。

野を廣み草こそしげき

また。

難波人あし火たく屋の蝶したれど

おのが妻こそとこめづらしき

催馬樂に。

小芹こそもでゝもうまし

ふどある如く「き」「しき」にて結びたるは。歌の特例にて口調の都合に因るものと知るべし。

また「こそ」の結ふらでは。「ぬれ」「つれ」「けれ」「來れ」「給へれ」などは用ひぬ定格なるを。萬葉集の長歌に。

天づたふ人日さしぬれ云々

玉きはる命たえぬれ云々

いたづらに過しやりつれ云々

露霜の過ぎましにけれ云々

大雪のみだれて來れ云々

こがねありと奏し給へれ云々

ふどあるは。何れも「ぬれば」「つれば」「ければ」「來れば」「給へれば」と言ふべき「ば」文字を略したる特例ふり。

古歌の嚴格ふるものにも。既に散文と違ひて特例を許したる此くの如し。未來の新體詩にも此かる特例の起らん事自然の勢ふるべし。然れども古體の和歌にも熟達し新體の詩歌にも老練なる人にして。始めて此特例をば設くべく。未だ其域に至らざる人の輕々しく手を出だすべき事には非ざるべし。さりとて或文法家の如く。歌に特例を設くる理は萬々無しとて。嚴重に之を攻擊する如きは亦惑へるの甚しきものゝみ。

（十）題の附方

題はどうでも宜しかるべし。本文さへ優れたらばといふ人も有らん。然れども題は歌文の看板なり。入口には河童を畫かきて中には合羽を釣るし置く如き虚喝手段は必要ふけれど。賣物にはべにをさす類の愛嬌方便をば。用ひんこそ花の上に花を添ふるには在るべけれ。新體詩は美術の一なり。謂はゆる美術品ふるものは。畫にもせよ彫刻にもせよ。其目的とする物體の意匠と手際との外に。表裝等の附屬物中些少の缺點をも見出ださば。其不愉快の感情は遂に及ぼして本體の美妙をも放棄せしむるに至らんも知るべからず。是れぞ完全無缺を要する美術の美術たる處ふるべき。題の歌文に於ける。抑も亦おろそかにすべからざるふり。

古人の用ひ來りし題の種類を別てば五つとなる。すなはち。

(イ)漢文題　(ロ)和文題　(ハ)漢句題
(ニ)和句題　(ホ)名詞題

是なり。

(イ)漢文題……は。未だ平假名もて國語を記す事の始まらざりし上古に。變則の漢文もて彼詩題に擬し書きたるが例と爲り。後世までも長歌とさへいへば。萬葉集に擬して用ひしものなり。たとへば。

イ。感傷近江舊堵作歌。

ロ。從長門浦舟出之夜仰觀月光作歌。

の類なり。既に我國語もてする新體詩に。今更平假名ふかりし時代の書方を用ふるに及ばぬは。火を見るよりも明かふれば。これは新體詩の領分に犯入せしむまじきなり。

(ロ)和文題……は。平假名の便利おこりて以來。古今集以下の勅撰私撰歌集を始として。今日まで歌人の用ふるものなり。たとへば。

イ。春立ちける日よめる。

ロ。家にありける梅の花の散りけるをよめる。

ハ。隣より常夏の花を乞ひにおこせたりければ。をしみて此歌をよみてつかはしける。

などの如く。其歌よみたる時の實況を註しおく爲めに多く用ひたり。されば之を「前がき」「端がき」「詞がき」「小序」などゝ稱ふ。

是は新體詩にも。實況を註しおくべき必要あらば用ふべしといへども。ふるたけ簡潔にして濟まさんこそ題の本意ふるべけれ。題の長々しきは實に嫌惡すべき感情を引き起すものなればふり。況んや名詞題にしても句題にしてもよきものに於てをや。

(ハ)漢句題……は。漢文題より出でゝ一種定式の歌題とふりたるものふり。

たとへば。

早春霞　春色浮水　花如雲

水鷄驚夢　馬上聞鹿　折紅葉

などの如く假名を交へずに書きたるをいふ。新體詩には用ふべき處ふきが如し。

(二)和句題……は。和文題より出でたるものと。歌中の文句を抜き出だしたるものとの二つあり。和文題より出でたるものは。

イ。月きよし。　ロ。一夜風あれたり。

ハ。友を待つ。　ニ。旅ふる妹に。

などの類ふり。是は用ふべし。

歌中の文句を抜き出だしたるものとは。其はじめの文句または主眼たる文句などを題にしたるを云ふ。是は古體和歌には餘り見ざれども。歌曲には常に用ふる事にて。謠曲中にも。

この音樂にひかれつゝ。聖人御代に又出で。云々。(難波)

といふ一段をば特に「この音樂」と稱へ。

千秋樂には民を撫で。萬歲樂には命をのぶ。云々。(高砂)

の一段をば「千秋樂」と稱ふるなどの例もあり。俗曲には。

嵯峨やお室の花ざかり。云々。

といふ唄を「さがや」と呼び。

過ぎにし梅の花見月。云々。

の曲を「すぎにし」と呼ぶも有るのみならず。西洋の歌曲には此くの如き題を多く用ふるよりして。近來の唱歌には普通の事となりたれば。之を用ひん事もとより妨ふし。たゞ口調よく記臆し易き語勢の句に非ずんば用ふまじきに注意すべし。

(ホ)名詞題……は。古今雅俗を問はず和漢洋を論ぜず。何種の歌人も常に用ふるものなるが。是に二つあり。たとへば。

春風　雲雀　ほたる　初雁

落葉　夕暮　山里　旅

ふどの如く。其歌中の主たるものを以てすると。または源氏物語の巻の名。謠曲以下の歌曲の名の如く。主たる詞にはあらねど。其歌中にあらはれたる優美の名詞を取りて題にするとの別ある是なり。何れにしても用ふべきは異議ふし。

(十一) 書　式

歌の書式は書き下しにすると別けて書くとの二樣あり。書き下しにするとは。たとへば。

やすみしゝ。わご大君の。かしこきや。御陵つかふる。山科の。鏡の山に夜はも。夜のことゞ〳〵。晝はも。日のことゞ〳〵。音のみを。泣きつゝありてや。百

數の。大宮人は。行き別れふむ。

の如く散文と同一樣の書方にするを云ふ。

別けて書くとは。たとへば。

イ。やすみしゝ　わご大君の　かしこきや　御陵つかふる　山科の　鏡の山に　夜はも　夜のことゞ　晝はも　日の　ことゞ　音のみを　泣きつゝありてや　百しきの　大宮人は　行きわかれなむ

ロ。やすみしゝわご大君の　かしこきや御陵つかふる　山科の鏡の山に　夜はも夜のことゞ　晝はも日のことゞ　音のみを泣きつゝありてや　百數の大宮人は　行きわかれふむ

ハ。やすみしゝわご大君の　畏きや御陵つかふる　山科のかゞみの山に　夜はも夜のことゞ

晝はも日のことゞ　音のみを泣きつゝありてや

百數の大宮人は　行きわかれなむ

の如く。句の間を切り又は句の頭を揃へて書くを云ふ。

また短歌の下の句を下げて。

春立つといふばかりにや三吉野の　山も霞みて今朝は見やらん

など書く式に習ひ。

ニ。春の彌生のあけぼのに　四方の山邊を見わたせば　花ざかりかも白雲の　かゝらぬ峰こそ無かりけれ

など書くをも此内に數ふべし。

さて以上さまゝの書式ある内。新體詩には何れをか撰ぶべきといふに。書き下しにするは。餘り冷淡なる取扱に似たれば好まゝからず。別けて書かんこそ。讀みよく體裁うつくしく愛嬌ある方法なれば。最も撰ぶべきに似たり。其内にも二(春の彌生)の書式殊に衆望を得べきに近し。然れども句格の都合によりては。八(頭を揃へる)の式も然るべし。とにかく新體詩は美術なれば。書式にも注意して體面を優美にせんことこそ必要ふれ。

(十二) 讀法

詩歌は口調をとゝのへて謠ふべく吟ずべく作りたるものふれば。之を讀むにも書簡文の如く受取證文の如く。押揚ふき捧讀にすまゝきは疑なかるべし。然らば如何に讀むべきといふに。之を定むるはずぬぶん困難の事なり。先づ百人一

首を讀む節にも種々ありて。

イ。あきのたの。かりほのいほの。とまをあらみ。
ロ。あきのたの。かりほのいほの。とまをあらみ。
わがころもでは。つゆにぬれつゝ。
わがころもでは。つゆにぬれつゝ。

などを始めとし外に幾種もあるべければ。何れを標準とすべきか。頗る其方向に迷ふべし。然りとて之を等閑に打ち捨て置かば。節を附けて朗讀するものは自分勝手の口調。謂はゞるチヨボクレ節ジヤンジヤカ節などの如く。聞くにも堪へぬものを製造し出ださん恐あり。又自分節をも製造する能はざるものは。默して見るあるを知れども發聲して讀むあるを知らずして止みふん。是れ果して詩歌の本意たるべきか。然りと答ふるものは非ざるべし。

彼支那流の詩人が詩句を考へつゝ有るを見よ。桃花ァ水ゥ暖にィしてェ輕舟をオ

送るゥと。節を附け發聲しては口調を試み。また前句を吟じ味ふ内に後句を得る好方便あるに非ずや。新體詩にも亦この好方便を得ん事は希望すべき事ふるべし。さて試みに新案として先づ第一着に議すべき讀法は。

イ。くさまくら。たびのうれひを。
　　ふぐさもろこともあらんと。

ロ。かりがねも。さむくきふきぬ。
　　あきかぜに。しらふみたちぬ。

ハ。けふもかも。めしたまはまし。
　　あすもかも。とひたまはまし。

の如く。或は前句の終を上音にして後句の終を下音にするか。或は前を下音。後を上音にするか。又は前後とも下音にて終らしむるか。諸君は度々口ふらし試み。從つて他の文字をも上音下音に讀みためして。而して後まづ我自身の新體

詩讀法を定むべきにあり。こゝには五七調の例を示したれど。七五調にても其他何調にても同じ事ふり。讀法定まりたらば。おのづから口調も其妙を得るに至るべし。ふほ此讀法をして普通の定格たらしむる事は。諸君の試みて用ひて而して後に在るべければ。先づ近きより始めざるべからず。

(十三) 結論

讀者諸君は既に新體詩の來歴と其組織とを學び得たり。而して其目的と性質とは或は未だ明亮ならずと詰らるゝもあらん。抑も詩歌には外面に備へたる性質と内部に備へたる性質とありて。外面のものは。前に縷述せし如く制限ある字數句數を用ひて。長短不規則ふる散文の字句と異なる點にあり。内部のものは最高最大の美妙を表はすこと。散文よりは比較上多數をしむる點にあり。

然れども。散文にも最高最大の美妙を表はもこと。詩歌と異ふらざるあり。又歌にも美妙の表はし方。はるかに散文より劣れるもあり。されば字句の數のみ規則だちたりとも。精神卑俗ならば新體詩とは言はるべからず。また精神のみ美妙なりとて。字句の數不規則ならば。是また新體詩と言はるまじきものなりと知るべし。

最高最大の美妙を表はすは新體詩の目的にて。字句の數を揃へ音調を整ふる事は新體詩の方便ふるを知ると同時に。美妙とは如何なるものぞとの疑問起らん。美妙の定義と之を表はす方法とは。載せて前編の修辭學に在り。請ふ之を讀んで新體詩を作る目的を熟知せよ。

(十四) 參考室

正月六日ばかり。よべの雪のふごり見んとて。隅田川に船をうかめて。

村田春海

みをのぼる。隅田川原の。
上つ瀨の。堤を見れば。
去た草の。みどりもわかず。
春の日を。早く待ちえて。
下つ瀨を。かへり見すれば。
波の上に。友呼びかはし。
夕虹の。たつかとばかり。
かゝる中橋。
消えぜずはあすもとひこん墨田川
川とほ去ろくふれる淡雪

川船の。もくかた遠き。
去ら雪に。ふほうづもれて。
たちふらぶ。木々の梢は。
うら〳〵と。煙り初めたり。
こほり居し。蘆邊の洲鳥。
をちかたや。霞の間より。
久方の。雲井にたかく。

（語釋）みをのぼる……水脈のぼるの意。○とはしろく……遠著くの意。

柳　　僧　辨　玉

簾こそ。編みては懸くれ。　　簾こそ。取りては拂へ。
編まふくに。軒ばにかゝり。　　取らふくに。庭の面はらひ。
簾なし。日かげをへだて。　　簾なし。塵うちはらふ。
吾宿の。玄だり柳は。　　みやび男の。友の訪ひこん。
まけをかもする。

（語釋）まけ……設の意。用意に同じ。

樵路春月　　僧　辨　玉

長閑ふる。春の山路に。　　咲く花を。見てや後れし。
夕月を。待ちてや暮れし。　　真柴ぶひ。歌ひつれくる。
山がつが。聲すなり。　　家路とめ。今かへるらし。

里さして。今かへるらし。　　真柴ぶひ。歌ひつれくる。
山がつが。聲すなり。
さき續く花もおぼろの月かげに
木こりが歌は霞まざりけり

野遊　　石井義卿

あさみどり。霞む春日の。　　すゞふ草。にほへる野邊に。
圓居して。いざ遊びふん。　　ひばり鳴く。それだにあるを。
なり〳〵は。岡邊の松に。　　うぐひすも。來ては鳴くなり。
いざこゝに。飲みて遊ばん。　　見つゝ聞きつゝ。

詠蝶　　石井義卿

櫻花。にほふあたりに。　　ひとつ見え。ふたつ顯はれ。
ときの間に。數々いでき。　　うらむれて。むつるゝ蝶よ。

飛びわかれ。飛び集りて。
たれも皆。見つゝ飽かぬを。
櫻花。えだうちたゝき。
飛びぞわかるゝ。
蝶や花はふやてふとも見ゆるかな

吹く春風にみだれ〳〵て

たはれつゝ。遊ぶこてふよ。
面白と。いひつゝあるを。
風ふけば。またちり〳〵に。

花處々

花ぐはし。櫻さければ。
人の家の。花も見がほり。
鶯の。ひとくとゝぶむ。
子鶯の。いざあとさそふ。
咲く花の。宿を訪はまし。

僧　葬　玉

吾宿の。はふに人まち。
けさも又。訪はんとすれば。
けさもふほ。やめんとすれば。
いざけふは。ふがやくかたの。
鶯に。わぎへのそのゝ。

花はまかせて。

（語釋）花ぐはし……櫻の枕詞。○見がほり……見たく思ふの意。○ひとく……人來々々と鳴くよし古歌によみ習はしたれば云ふ。○なが……汝がにて鶯を指す。○わぎへ……我家の意。

吉野川に花ちりてながる。

みよし野の。山の櫻は。
高ねにし。嵐ふくらし。
みよし野の。山の櫻は。

春　興

春の野は。道ぞもかれぬ。
初わらび。生ひまゞりけり。
行く先に。ひばり鳴きたち。

本　居　宣　長

たきの川瀨に。散りて流るも。
川上に。あらしふくらし。
たきの川瀨に。散りて流るも。

海　野　遊　翁

右ひだり。すみれ花咲き。
すみれ草。つまんとすれば。
初わらび。折らんとすれば。

來しあとに。鶯なきて。
道ぞもかれぬ。

春　歌

梓弓。春の彌生は。
吹く風も。袂にぬるみ。
軒端には。燕ぞ來ふく。
朝日かげ。にほひうつくし。
とり〳〵に。あらそひたてり。
春にやはあらぬ。
花鳥にけふもむつれてそことなく
裳裾かゝぐる春のこのごろ

（語釋）野づかさ……野の高き處を云ふ。

おもしろみ。聞きすてがたみ。

六人部是香

うら〳〵と。日影のどけく。
雲井には。雁金かへり。
あし引の。山の櫻は。
野づかさの。菫蕨は。
野に山に。もくてにあかぬ。

暮春

鶯は。ちる花よりも。
咲く花は。もく春よりも。
身をつみて。今ぞ去らるゝ。
もく春の。わかれ思へや。
かねて散りけん。

首夏歌

庭のおもに。こだる楓は。
軒近く。生ひたつ竹は。
四方山は。青垣山と。
野の邊には。青菜も麥も。
軒端には。燕妻よび。

僧辨玉

早くより。鳴きてわびぬる。
ときだちて。散りて過ぎにき。
散る花の。うさを思へや。
そこもゐに。かねて鳴きけん。

六人部是香

このくれに。みづえさしおほひ。
きぬぬぎて。百枝さしそひ。
一ついろに。若葉に茂り。
おしふべて。赤らみあへり。
林には。貌鳥來なく。

天の原。そらもうらゝに。
いざ子ども。野山にまじり。
手にや馴らさん。
若葉そふ木々のみづえのれびやかに
心ゆたけき夏のこのごろ

（語釋）こだる……木垂の意。○このくれに……木の暗くなるを云ふ。○みづえ……茂り榮えたる枝。○國原……國の廣く見わたされたる處を云ふ。

國原は。煙ゆたけし。
赤玉と。照れる覆盆子かな。

首夏風　　海野遊翁

折にふれ。めづるはこゝろ。
心こそ。さだめもあらね。
花ゆゑに。いとひし風を。
吹きわたる。いろを涼しみ。

時につけ。かはるはこゝろ。
彌生山。花咲くころは。
夏たちて。茂りあへれば。
めづらしと。待ちこそむかへ。

そよぐわか葉に。

螢　　海野遊翁

空はまだ。暮れもあへぬに。
生ひ茂る。蘆の葉がくれ。
時のまに。暮れゆくまゝに。
里の子の。おくれ先だち。
とびちがふ。螢を狩るゝ。
いりみだれ。亂れぞ遊ぶ。

海上夕立　　橘守部

和田の原。ふりさけみれば。
汐ふわの。とゞまるぎかり。
時のまた。空かきくれて。
遠近の。川瀬の眞菰。
一つ見え。二つあらはれ。
川瀬みな。螢にふれば。
うちきほひ。きほひ出でゝ。
笹葉もち。團扇手にもち。
川べづたひに。

白雲の。むかぶす極み。
庭もよく。晴れたる海の。
あげ汐を。おろしもあへず。

干す網を。たぐりもあへず。
邊を見れば。鰐のいぶきか。
ふる神か。くづれおちぬと。
その雨の。見のおそろしき。
白波を。沖にのこして。
夕立の。空さりげふく。
海のおもてを。

（語釋）むかぶす……雲の地上に向ひ伏すの意にて天のはてを云ふ。○汐なわ……汐の泡の意○。庭……海上を云ふ。○いぶき……息吹の意。○いまく……巻くといふに同じ。龍巻の事。

船中納涼

夏の日の。あつさいとひて。

沖見れば。鯨の汐か。
みそらには。龍かもいまく。
その音の。聞きのかしこく。
青海原。かぜのふごりの。
見し雲は。いづちいにけん。
夕日影。たゞさしわたる。

僧　辨　玉

暮まちて。舟乘りすれば。

さしそはる。潮もかふひて。
吹く風に。暑さは消えぬ。
夕月も。かげすみぬらん。
よる波の。影のよろしも。
入日さすふり。

（語釋）かなひて……滿潮になるを云ふ。○豐旗雲……夕日の空に旗の如く美しく棚引く雲を云ふ。

夏の歌

山ちかく。家居しをれば。
ゆふべには。見さくる山。
あしたより。いや立ち榮え。
夕べより。しゞにふりゆく。

藤　原　土　滿

あしたには。みわたす山。
あした見て。夕べに見れば。
夕べみて。あしたに見れば。
夏山の。去げき木のまに。
うちよする。波もしづけく。
ゆく水に。夏はふかれぬ。
滿つ潮の。さしてすゞまん。
川上の。豐旗雲に。

ほと、ぎす。來鳴きとよもす。

（語釋）見さくる……ながめやる事。○とよもす……あたりを響かす事。

立秋

蓬生は。いつとわかねど。
ふどてかく。淋しかるらん。
露おかぬ。苔のかよひぢ。
秋の來るより。

田家虫

あぜづたひ。つたふ細道。
むら〳〵に。薄穂にいで。
虫づけきは。田中の庵ぞ。
や、〳〵に。暮れわたるころ。

その青山に。

海野遊翁

秋の來る。今日の夕べよ。
穂にいでぬ。籬のすゝき。
見る毎に。あはれぞまさる。

海野遊翁

くろづたひ。過ぐる通路。
淋しきは。門田の秋ぞ。
たえ〴〵に。薄霧なびき。
垣根にも。くろにも虫の。

遠近に。や、ふきたて、。
ほの〴〵と。霧ににほへる。
ふりもゆくかな。
くれはて、月にふりゆく小山田は

虫の聲さへすみわたりけり

八月もちの夜。芳宜園にて月をみて。

村田春海

秋の夜の。いつはあれども。
昔より。人もいひつげ、
秋萩の。花ににほへる。
大かたの。世に似ぬ宿と。
月見よと。人もとひ來ぬ。

今宵こそ。たぐひふきよと。
てる月の。いづこはあれど。
白露に。うつろふかげは。
もろともに。手携はりて。
花見にと。我もおりぬて。

白露の。おくての稻の。
月かげの。さやかに聲の。

からころも。紐解きさけて。
あけずもあらふん。
この園ににほふまばぎのからにしき
うらもふく。遊ぶ此夜は。

たつことやすき月の夜半かは

（語釋）からころも紐解きさけて……古代の唐衣は紐もて結びしなれば。ろの紐をも解きて心をもるし遊ぶ事。今ならば羽織も袴もぬぎすてゝと云ふ程の意。

八月十五夜くもりけるに。

まそかゞみ。照るべき月を。
天つ霧。立ちか隔つる。
よしゑやし。霧は分くとも。
月のあそびせん。

村田春郷

白雲か。おほひかくせる。
よしゑやし。雲はたつとも。
うからやから。つどへる今宵。

（語釋）よしゑやし……よしやと云ふに同じ。○うからやから……家族親族を云ふ。

八月十五日夜雨いみじうふりければよめる。

月たちて。まだ三日月の。
いつしかと。待ちこしものを。
望の夜の。あたら此夜を。
風まじり。雨降りすさび。
こゝろふく。去をりに去をり。
ことふらば。天の八重雲。
世の人の。こゝろ足らひに。
萩の花のうつろふのみか此夜らの

加藤千蔭

西山に。ほのめきしより。
名におへる。なかばの秋の。
久方の。天雲おほひ。
さきにほふ。本荒の小萩。
花をさへ。こき散らしけり。
咲きはらひ。月の面輪を。
見せんよしもが。

名をさへ雨に朽たしはてつゝ

（語釋）ことならば……相成る事ならと云ふ程の意。○心足らひに……滿足すべくの意。

紅葉

僧辨玉

露霜に。染めて色こく。
つひに吹く。風や散らさん。
手をらんと。陰にはよれど。
後に來ん。人やうらみん。
たゆたひて。とりてはをしみ。

秋山に。にほへる紅葉。
散らすらん。つらさ思へば。
たわめんと。下枝は取れど。
恨むらん。ふげき思へば。
おきてはをしむ。

凌雲院にまかりける時。前栽の菊を見て。

香をとめて。誰とはざらん。
庭もせに。このもかのもに。
いつしかと。待ちけん君よ。
いかにこは。樂しかるらん。

海野遊翁

花見つゝ。誰めでざらん。
菊といふ。菊をうゑふべ。
いかばかり。うれしかるらん。
やゝ〳〵に。綻びそめて。

赤ろたへに。から紅に。
長月の。長き盛を。
にほふこの菊。

冬歌

水鳥の。鴨川堤。
川瀬には。千鳥赤ばなき。
大比叡や。小比叡の山は。
大原や。小野の山ふみ。
棚橋を。わたらふはしに。
あし引の。北山おろし。
あわ雪の。みだれて來れ。
並み立てる。松だにみえず。

六人部是香

朝霜を。踏み分けゆけば。
田面には。たづがね寒し。
ふる雪に。尾上ましろに。
炭竈の。煙ぞくろき。
久方の。空かき曇り。
衣手に。赤まきわたれば。
かみふぶの。森もいがくれ。
玉ぼこの。道ゆきかねつ。

さま〳〵に。にほふ此菊。
明暮に。みるとも飽かじ。

いかにしてまし。
うちはらふみぎりひだりの衣手も
ふほ白雪のふりおもりつゝ
（語釋）わたらふはしに……渡る間にの意。○玉鉾の……道の枕詞。

石井義郷

薄暮松風

にはかにも。ふり來る雨と。驚きて。出でゝし見れば。
雨降ると。きくは松風。曇りぬと。みしは夕暮。
いつしかと。木のまに月の。ひかりかゞやく。
今日も又風ふく松にはかられて

詠眞嬬山歌

ふりくるあめと思ひけるかな

加納諸平

此山日高郡の高山にして。丹生津比賣大神の天降りましゝ山といひ傳ふ。

丹生告門に江川の丹生に忌杖刺給ふと見えたる時の事ども思ひよせて。
鄕長瀨見善水にあたへたる歌ふり。

かけまくも。かしこけれども。　丹生津姫。かみのみこと。
韓國を。ことむけまして。　朝もよし。紀の此國に。
いみ杖を。刺させ給へる。　宮處。さはにあれども。
日高のや。江川の丹生は。　谷川の。清き瀨の音と。
御心を。よせ給へばか。　里々に。こゝだ祭れる。
けだしくも。故かもあると。　里長に。わが問ひきけば。
里長の。われに語らく。　いにしへの。事は忘らねど。
天飛ぶや。鳶のつばさに。　その神の。乘らし給ひて。
かの見やる。いづの高山。　はしづまの。まつまの山に。
くす忘くも。天降りましゝや。　つがの木の。つぎてもろ〳〵。

いつくしし。きゝ傳へぬと。
真孀はや。はしき山かも。
男さび。壞たゝふみ。
をとめさび。秋萩しふひ。
古も。去かにあれこそ。
くす去くも。天降りましけめ。

（語釋）ことむけ……征服する事。○朝もよし……紀伊の枕詞。○いみ杖……清淨なる杖の意。神の御杖なれば云ふ。○さはに……多くの意。○いづの……清淨の意。○はしづまの……愛らしき妻の意。まつまの序詞なり。○天降……あもりと讀む。○つがの水の……纒きての枕詞。○いつく……祭るの意。○たゝなみ……疊より重なるを云ふ。

竹をめづる歌。

我國に。うつしう去たる。
かつ〳〵も。吾に語りき。
青雲に。そばだつ峰は。
よぢのぼる。麓の小野は。
朝よひに。見がほし山ぞ。
ことむけし。神のみことの。
はしき神山。

中島廣足

いくみ竹。よ竹。

年のはに。根はひほびこり。
いや高く。おひたち榮え。
風ふけば。音もさやゝ。
朝よひに。見の乏しもよ。
琴にも。つくりてひかん。
おむかしき竹の。

（語釋）いくみ竹よ竹……竹の美稱。○年のは……年毎に同じ。○ほびこり……はびこりに同じ。○たかむな……筍の事。○見の乏しもよ……見て愛する事。

詠茶歌

山城の。宇治のわたりは。
川がらし。さやけかるらし。
うゑおほす。春の木のめの。
夏まけて。生ふるたかむな。
いや茂く。枝さしそはり。
雨降れば。露もとをゝに。
かくのごと。榮はえゆかば。
笛にも。つくりてふかん。
いくみ竹。よ竹。

中島廣足

山がらし。貴かるらし。
もろこしの。種を傳へて。
こゝをしも。國のまほらと。

世々をへて。しみ榮えつゝ。　天の下。四方にたゝへて。
たぐひなき。名にこそおへれ。　世の中の。うぢのわたりと。
いひつぎし。昔の人は。　かけてしも。おもはざりけん。
かくばかり。尊き木のめ。　年毎の。春のさかりに。
玉ぼこの。里もとゞろに。　つみ出でんとは。

（語釋）山がら……山がらに因りての意。○國のまほら……國の中央といふに同じ。○たゝへて……稱美する事。○世の中のうぢのわたり……世を宇治山と人はいふなりの意を引きて云ふ。世を憂く思ふを宇治にいひかけたるなり。○玉ぼこの……こゝにては里の枕詞。

鶴雲井にあそぶ。　海野遊翁

朝まだき。みどりの空に。　白雲の。なびくとみれば。
白鶴の。二むら三むら。　まなづるの。四むら五むら。
なきつれて。むれ渡り來て。　大空を。かふたこふたへ。

ゆきめぐり。めぐり遊びて。　白鶴の。ふきつれ行けば。
真鶴の。ゆきかさなりて。　なきかはし。跡より跡に。
つぎ〳〵に。雲井はるかに。　ふりにけるかな。
ふきかはしむれゆくたづは大空に
千代をかさねて見するふりけり

童子　黑澤翁麿

物見るに。さはる目ざしの。　かきもやらず。うち傾きて。
額髮の。垂るゝ年へて。　みつぐりの。中の一つを。
手に持てば。二つは取らず。　悲しけに。なくかとみれば。
うれしげに。笑ひもしつゝ。　何事を。思ふともふく。
おもたろく。遊び狂ひて。　世の中に。かしこきものは。
君と思ひ。悲しきものは。　父母の。ほかにありとも。

思ほえぬ。わらはうつくし。
又もふりてしが。

（語釋）目ざし……童子の髪ののび下りて目を刺す程の年齢を云ふ。○みつぐり……中の枕詞なると。兼二つの意にかけて云ふ。

我もその。童ごゝろに。

美人對鏡

間宮永好

ます鏡。とりふべかけて。
腰細の。すがる少女が。
みなのわた。か黑き髪を。
かきけづり。たぎて來ねて。
望月の。足れるおもわに。
白きもの。かきにほはして。
山櫻。笑めるが如く。
青柳。もゆるが如く。
とりよろひ。居らくを見れば。
天よりか。くだり來にけん。
地よりか。あれ出でにけん。
はしきやし。妹がためには。
國家も。何にかはせん。
わぎのちも。惜しくはあらず。

こゝだくの。人ぞ思はん。
我もまた。去かこそ思へ。
去かはあれど。此年の緒は。
梓弓。矢よりもはやく。
とりつなぐ。物にあらねば。
さばかりの。花の姿も。
やゝ〳〵に。にほひ移ろひ。
かしらには。雪ぞふりなん。
顏には。波ぞよりふん。
さしむかふ。鏡のかげを。
大舟の。思ひたのみて。
末つひに。よるべふき身と。
はふらすなゆめ。

（語釋）とりなべ……取り幷べの意。○すがる少女……美人の形容。すがるは腰細き鹿の名なりとも云ふ。○みなのわた……蜷といふ貝の腸は黑き物なれば。黑きの枕詞に用ひたり。○たぎて……たくしあぐる事。○望月の……足れるの枕詞。顏の形容をも兼ねたり。○はしきやし……愛らしきの意。○わぎのち……我命の意。○大舟……思ひたのむの枕詞。○はふらすな……零落させる勿れの意。

王昭君

咲く花の。にほへる毎に。
われこそは。顔よき少女。
宮づかへ。つかへし時は。
誇らしく。思ひし我身。
あくる日は。君にふらびぬ。
睦びつゝ。あらましものを。
すみなれし。都を出でゝ。
見ず知らぬ。荒きえびすが。
我こそは。かなしき女。
晝はたゞ。恨みにしづみ。
月見れば。都こひしく。

石井義鄕

照る月の。てらすが如く。
われにます。人はあらじと。
うち笑みて。ありこし此身。
暮るゝ夜は。君に添ひふし。
明暮に。思ふことふく。
榮えつゝ。經ふましものを。
言だにも。通はぬ國の。
その人の。妻とふれゝば。
我にます。うさはあらじと。
夜はたゞ。歎きにふかし。
花見れば。涙こぼれて。

あけくれは。思ひぞ盡きぬ。
もの思ひあらぬ我身とおもひしや
たえぬふげきのはじめふりけん
いまゝでは物は思はじたまぼこの
道の空にて消えなましかば

漁舟を見てよめる。

中島廣足

朝しほの。みちのとゞみに。
あともひて。こぎつらふべて。
拷繩の。千ひろ打ちはへ。
夕しほの。なぎたる浪に。
よびたてゝ。あごとゝのへて。
はりわたす。網のやちひろ。
やゝ〳〵に。ひきよせあげて。
とりえたる。さはたひろはた。
舟ごとに。積み足らはして。
漕ぎきほひ。かへらふ海人の。
ほこらしげなる。

ねてもさめても。

（語釋）とゞみ……さわぎと云ふ程の意。○わともひて……誘ひつれての意。○打ちはへ……延ばして海に入るゝ事。○わで……網子の意。○さはたひろはた……狹鰭廣鰭にて大小の魚を云ふ。

看蒸氣車走鐵道偶爾作歌

久堅の。空のどけきを。
龍神か。いまきのぼれる。
ふりひゞき。音ぞ轟く。
その音は。車の響き。
つらなれる。屋形のうちに。
敷きわたす。くろがねの道。

（語釋）くろがねの道……鐵道の意。

伊勢山招魂祭碑之歌

僧　辨　玉

ふる神か。くづれおちくる。
かきくらし。雲ぞ起れる。
その雲は。たく火の煙。
たちどまり。見る間もあらず。
こゝばくの。人つどへ乘せ。
走りてすぎぬ。

僧　辨　玉

隼人の。さつまの國の。
壯夫の。功たゝへて。
磯邊には。波の音とよみ。
ありしよに。挑みたゝかひ。
木留の。とまらずすゝみ。
木がらしと。うち散らしけん。
その聲を。風もたつるか。
われだにも。心さまねし。

（語釋）隼人の……薩摩の枕詞。○いぬち……命に同じ。○いむかひ……向ひに同じ。○心さまねし……心に悲しく感ずる事。

秋の七草の繪によみて書きける歌　中島廣足

いにしへの。みやび少女の。
ことむけに。いぬちすぐとふ。
石ぶみに。いむかひをれば。
山べには。松風さわぐ。
田原坂。さゝふを崩し。
木の葉村。むらしく冠を。
その音を。波もよするか。
見も去らず。言もかはさぬ。
そこし思へば。
春をおきて。心をよせし。

秋山の。紅葉はあれど。
むきわたす。露もとをゝに。
ふつかしき。色にしかめや。
くさ〳〵に。にほふ中にも。
秋風に。袖ふる尾花。
ふでしこの。盛久しく。
ぬぎかけし。人しのばしき。
朝顔の。ゑみのまゆさへ。
秋野ぞ我ば。

（語釋）とをゝに……たわむほどの意。

述懷

父母の。たまへる此身。
朝霧の。はれやく野邊に。
咲きにほふ。千草の花の。
いろ〳〵に。咲ける中にも。
さをしかの。妻ごふ小萩。
葛花の。玉まくかづら。
女郎花。ふまめき立ちて。
藤袴。あかぬにほひに。
開けたる。そこし面白し。

黒澤翁麿

うしといひて。何か恨みん。

大君の。しらせる此世。
むらぎもの。我心ゆゑ。
玉の緒の。ふかくはあらぬ。
おほには有り經じ。

（語釋）しらせる……知しめすに同じ。○おほには……等閑にはの意。

難波より東に下れりける時に。大井川の水にさへられて。金谷の宿に久しうありける時によめる。

武士は。まけのまに〳〵。
まつりごつ。事はしげゝど。
年のはに。行きかへらへば。
花になれ。紅葉になれて。
故郷の。門出しよりは。
うしといひて。何か歎かん。
たのしくも。安くもすぐる。
いきの内を。一日一夜も。

黒澤翁麿

かもかくも。君が御爲と。
つかさどる。事は多けど。
あしがちる。難波の人も。
別れをば。をしといひけり。
月重ね。年も經ぬれば。

歸るをば。待つといふふり。
久方の。あまづゝみして。
まけながく。うらふれをれど。
難波津に。ふほやはあると。
故郷に。今やいたると。
行きもやらず。歸りもやらず。
わびしきものを。

（語釋）まけ……任の文字なり。○まつりごつ……政をする事。○しげゝど……繁けれどに同じ。○あまづゝみ……雨に降りこめらるゝ事。○うらふれ……さびしくする事。

橋永世が屋を高くつくりて。其みやるさまをよみてよとこひけるに。

加茂真淵

我はもや。草のまくらに。
をとつひも。昨日も今日も。
千はやぶる。神ふらぬ身は。
故郷の。人やうらみん。
難波津の。人やしのばん。
みつぐりの。中空にして。
東なる。遠のみかどに。
百千里。家はあれども。

とりよろふ。山は見ゆれど。
宿ながら。朝夕見つゝ。
とりよろふ。家にもあるか。
常夏に。めづらしきかも。

（語釋）遠のみかど……遠所にありて朝廷の御代理に政事を執る官廳を云ふ。こゝは江戸幕府の事。○もゝちだる……百千足の意に用ひたり。○とりよろふ……具備せしと云ふ。○常夏に……夏と透しての意。

志摩の國なる鳥羽の嶺に登りてよめる。

村田春郷

ゝしろつく。答志の崎の。
一つ立つ。鳥羽の小峰に。
かげどもの。坂手菅島。
まそかゞみ。清き浦わに。
登りたち。ふりさけ見れば。
たふとに。摘みもしつへく。
天の原。ふゝの高ねを。
もゝちだる。心はしりぬ。
もゝちゝの。時は行けども。
富士の白雪。

青波に。浮びふらべり。
そともふる。白浪のへに。
參河の。いらごが崎は。
霞ふす。遠くぞ見ゆる。
此浦に。うべも船よす。
島清み。見れどもあかず。
我友は。こともつたへよ。
沖つ舟人。
やしま國も、船人のふねよする
とはの浦わはみれどあかぬかも

（語釋）〳〵しろつ〳〵……答志の枕詞。○かげとき……南を云ふ。○こまつるぎ……わく島の枕詞。○ろとも……北を云ふ。○荒浪の間も……荒浪の間よりの意。○風もる……舟と

こまつるぎ。わく島山は。
か青にぞ。山並み立てる。
神島の。荒浪の間も。
やしま國。百船人の。
此山に。うべも風もる。
家人に。みせましものを。
島がなく。東にくだる。

泊して風間を待つ事。

僧祐達綸旨まうしに都にのぼるを送る。　加茂真淵

東より。春こそ立てれ。
その春に。君さそはれて。
おのづから。御法の花の。
春の日も。限りこそあれ。
常盤なす。御法の花の。
つゝみもて。霞の袖の。
世の人のため。
東より春にともふふゆくへこそ
のりの花さく都ふりけれ

都べに。花こそ咲けれ。
その花の。都にゆくや。
開くべき。春ふりけらし。
さく花も。うつろふものを。
すゑ〳〵も。絶えぬ馨りを。
たち歸り。はやぶほはなん。

青木美行が越の道の口に行くを送る歌。　加茂　真淵

霞たつ。あづまの比叡の。　花さけば。袂ふりはへ。
秋の水。隅田川原に。　月みれば。小舟を浮べ。
水無月の。てる日の空も。　冬ごもり。み雪ふる日も。
ちぎりたる。事としいへば。　さはらへず。行きかひしつゝ。
川舟の。浮べるごとく。　とのへには。たはれもすれど。
山櫻。かぐはしみふす。　うちべはも。まことありけり。
うるはしき。此友がきの。　みちのくち。さかひの國に。
坂もこえ。海も渡りて。　はる〳〵に別れやくかも。
てる日にも。さゆる雪にも。　さはらへぬ。常の契りを。
頼めども。歸りこむ間の。　なりふしを。いかに過さん。
春山に。花もにほはず。　秋の水に。月の浮ばぬ。

心地して。遊びの道は。　さびしからまし。

（語釋）あづまの比叡……東叡山を云ふ。東京の上野の事。○とのへ……外面の意。○うちべ……内心を云ふ。○みちのくち……越のみちのくちは越前の事。

幸和が一めぐりの忌に。去年をしのぶあまりに。　海野遊翁

あはれ〳〵。夢とは此世。　うつゝとも。えぞ思ほえぬ。
つれもなく。思ひ出でゝと。　明暮に。思へど思ひ。
忘れんと。思へば浮び。　面影の。目にし絶えねば。
夢のごと。幻のごと。　ともすれば。かたへに有りて。
有りし世に。かたらひし樣。　物いひて。ゑみし其さま。
いける世のごと。
堪へわびて稱ふる御名のかず〳〵に

こぼるゝものは涙ふりけり

花月院の御一周忌に。去年を戀ひ奉りて。

石井義卿

敷島の。歌のしらべと。　たのめりし。ひたやの翁。
思へりし。海野の君は。　亡き人に。ならせ給ふと。
ひとゝ〳〵の。いひおこすれば。　おどろかれ。心まどひて。
一度は。ゆめかと思ひ。　一度は。うつゝとふげき。
悲しみし。月日うつりて。　春といひ。秋と暮れゆき。
一年と。はやなりぬるを。　今も猶。ゆめと思はれ。
うつゝとは。思ひぞあへぬ。　しかれども。君の玉章。
去年までは。絶えず來つるを。　開き見て。うれしかりしを。
玉章の。たよりもふくて。　今日までに。過ぐる思へば。

あはれげに。君は亡き人。
やゝ〳〵に。知らるゝまゝに。
いとゞしく。袖こそぬるれ。

安田休圓新室賀歌

船よする。五百の港の。　世の中に。常なき物と。
高きやに。登りて見れば。　別れにし。其をりよりも。
小豆島。いや二ふらび。　涙こぼれて。
百世にも。替らぬしるし。

荒木田久老

松が島。名もことはに。　堀川の。川邊の宿の。
沖つ波。ゆたに富みつゝ。　海原に。有り並み立てる。
ありかずに。うからやからも。　老人の。女男のちぎりの。
御心を。安田のむぢが。　家島の。うごかず缺けず。
千年にも。榮ゆるためし。
へつ波の。よするさゐれ石。
うまはりて。來入りつゞはん。
新室ほぎする。

（語釋）うまはりて……生まれ添ふ事。○御心を……心を安くするの意に云ひかけたり。

弘化二年二月廿八日。こたび新たに造らせたまへる大城の御殿に移らせ給ふをほぎ奉りてよめる。

海野遊翁

國々の。山といふ山。
石をさへ。切りに切りわたし。
天の下。千萬人の。
暮れやけば。大城をくだり。
土はこび。土おきふらし。
工らは。きほひのゝしり。
おのがじゝ。木を切りけづり。
たゆみふく。急ぎに急ぎ。
みがきなす。其大御殿。

はやしてふ林をつくし。
船路より。かちより運び。
明けたてば。大城へのぼり。
明暮に。いこふ事ふく。
石みがき。石すゑ渡し。
ねのがじゝ。むなぎ組み立て。
墨繩の。たゞ一すぢに。
建て渡す。それの大殿。
きさらぎの。末の八日を。

此月の。吉き日と定め。
一年も。いまだ經ふくに。
我君の。移ろひますを。

（語釋）おのがじゝ……銘々それ〳〵にの意。

四十になりける年よめる。

下河邊長流

あはれ我。二人の親の。
五月暗。物のあやめも。
鶯の。ふりよりもふほ。
たらちめの。其かふしびは。
うつたへに。我をひたすと。
床の上に。夜はとりふで。
抱きもち。はぐゝまれにし。

思ひ子と。生まれし時は。
まだ知らぬ。むつきの内に。
いぶせくて。有りけんほどに。
大海の。深き思ひの。
勝の上に。晝はかきなで。
あらき風。露にもあてじと。
袖の下に。三年もふれば。

此月の。足り日と撰び。
殿つくり。つくり渡して。
聞くが尊さ。

みどり子の。片ぬぎりして。
千鳥足。やと蹈みかため。
梓弓。八年といふに。
蘇命路の。山とし深く。
大丈夫の。道習はすと。
竹馬に。手づから切りて。
門の前。むちうち出だし。
招き集め。友むら〳〵に。
夕されば。門邊に騒ぎ。
しのゝめの。明くる待ちかね。
小弓取り。玉うちふらし。
雲雀ふく。頃にもふれば。

ともすれば。物にとりたち。
いつしかに。人と成されて。
たらちをの。其あはれびは。
行末の。名をさへ兼ねて。
家の園に。生ふる呉竹。
手綱つけ。我をすゝめて。
方々の。あげまき童。
あしたには。大路にとよみ。
新玉の。春の立つ日は。
門松の。暗きに起きて。
行く人の。道をさまたげ。
春駒の。野をふつかしみ。

淺茅生の。つばふ抜きにと。
家々の。軒端なづねて。
郭公。來ふく五月は。
武士の。木太刀とりはき。
うなぬ子の。石なつぶての。
水無月の。照る日盛は。
恐ろしき。底ともいはず。
おりのぼり。玉藻に遊ぶ。
水にのみ。なづさふほどに。
外山には。山雀わたり。
鵙鳴くと。人し告ぐれば。
長月の。青つゞらこに。

朝なゝ〳〵。出でぬ日もなく。
雀子の。かきりをさぐり。
菖蒲草。かざしにさして。
行く道に。敵むかへて。
勝負を。いどみ爭ひ。
かげろふの。岩垣淵の。
早瀧の。流れにそひて。
いろくづの。數せめとると。
秋の風。涼しく吹きて。
岡邊には。蘆の立枝に。
おのが時。今ぞ來ぬると。
をとり入れ。柴の立枝。

笹の枝に。もち引きかけて。
足引の。山を住家と。
遲き日は。母のこゝろは。
木枯の。膚とほすと。
我どちの。うふぬ子どもは。
苦しとも。思ひ知らねば。
小山田の。荒田のくろの。
となみ張り。かゝる遊びの。
身を任せ。ありつる時は。
知らざりき。かくて年月。
明けくらし。ありへし物を。
初めとも。思ひ知れとや。

朝露を。分けそぼちつゝ。
ありくらし。歸る夕べの。
騷ぎけん。時雨やゝふり。
老人は。わふゝく時も。
霜雪に。うるむ手足を。
朝川の。氷ふみわけ。
藪がくれ。通ふ小鳥の。
たはわざに。行方も去らぬ。
世の中の。憂きてふ事は。
古郷に。思ふ事なく。
空蟬の。世の悲しさの。
老いらくの。父のよはひの。

七十の。ふけ行く秋の。
敷妙の。枕あがらず。
朝雲に。たふびき行けば。
しるしふき。さらぬ別れの。
とゝまりぬ。其藤衣。
とりつゝき。怪しかりしは。
あたご山。もぎ木の枝の。
落しけん。我はらからの。
白波の。跡なき船か。
夕かげに。かげろふ虫か。
行く方も。見えずしなれば。
わびしきも。我身一つと。

風をいたみ。假にうちふし。
見るまゝの。夢としふりて。
戀ひしたひ。歎けど今は。
道芝の。露のみ袖に。
今しはと。乾しもあへぬに。
身の上に。何の報いの。
ほろ〳〵と。もろき命か。
はかなさを。何にたとへん。
大空に。めわたる鳥か。
時のまに。皆消え失せて。
世の中の。憂きもつらきも。
なりにけり。猶陰たのむ。

はゝそ山。千代もと仰ぎて。
つもり來し。よはひの末の。
猶よわき。玉の緒絶えて。
悲しさは。ありしにいくら。
飽かずのみ。思ひめぐまれ。
世の中に。あるにもあらじ。
麻衣。うつふしぞめに。
跡をだに。とはんと思ひし。
身の癖と。とげずなりにし。
くやしけれ。何と鳴尾の。
一人して。世に立てるべき。
中空に。とゆきかくゆき。

仕へしも。かゝる歎きの。
たつか杖。助くとすれど。
行く水の。また歸りこぬ。
まさるらん。こゝらの年を。
今更に。おくれては我。
うば玉の。黑髪おろし。
やつしても。亡き人々の。
心ざし。もとよりにぶき。
心こそ。わが心から。
浦に生ふる。濱松が枝の。
すべしなく。身を浮雲の。
迷ひつゝ。立ちよる山は。

風早み。木の葉ちりはて。
ふかりけれ。かくはあれども。
後瀨山。後せまつとて。
いたづらに。捨てもえやらで。
新玉の。四十の春に。
竹馬にふたゝび道をまかせても

雪ふるさとに歸る世もがふ

（語釋）うつたへ……ひたすらにの意に用ひたる如し。○ひたす……養育する事。○梓弓……矢と云ひかけて八の枕詞とす。○蘇命路……須彌山に有りと云ふ想像界の山の名。○あげさき……童を云ふ。○かげろふの……岩垣淵の枕詞 岩垣淵は岩にて垣の如く取り圍みたる淵と云ふ。○いろくづ……魚の事。○ことり……鳥を捕らんとて誘ひ寄する爲めに置く媒の鳥を云ふ。○わがゐち……我々同士の意。○となみ……鳥網の意。○たはわざ……

わび人の。頼む陰こそ。
我よはひ。まだ若狹路の。
かゝる身を。千引の石の。
けふ〳〵と。ありふるまゝに。
あひみつるかな。

戯業の意。○空蟬の……世の枕詞。○縣衣……喪服を云ふ。○今しはと……今はと丶云ふと同じ。○もぎ木……枝をもぎ取りたる木と云ふ。○めわたる……さわたるの誤にや。

景　清（謠曲。以下も同じ）　作者不詳

いで其頃は。壽永三年。
平家は舟。源氏は陸。
互に勝負を。決せんと欲す。
きよねん。播磨の室山。
ひよどりごえに。至るまで。
ひとへに義經が。謀。
いかにもして。九郎を討たん。
のたまへば。

三月下旬の。事ふりしに。
雨陣を。海岸に張つて。
能登の守教經。のたまふやう。
備中の。水島。
一度も味方の利ふかつし事。
いみじきに。よつてなり。
謀こそ。有らまほしけれと。
景清こゝろに。思ふやう。

判官ふれば。とて。
命を捨てば。易かりなんと思ひ。
陸に上れば。源氏のつはもの。
景清。これを見て。
打物。ひらめかいて。
双向いたる。つはものは。
のがさじと。
源平。たがひに。
一人を。とめん事は。
小脇に。かいこんで。
惡七兵衛。景清と。
手取にせんとて。追うてゆく。

鬼神にても。有らばこそ。
教經に最期の。暇乞ひ。
餘すまじとて、かけ向ふ。
物々しやと。夕日影に。
切つてかゝれば。こらへずして。
四方へばつとぞ。にげにける。
さもしや。かたくよ。
見る目も。耻づかし。
案の打物。
何がしは。平家の侍。
名のりかけ。名のりかけ。
美尾の屋が。着たりける。

冑の。しころを。
二三度。にけのびたれども。
飛びかゝり。冑をむつとり。
鎩は切れて。こふたに留まれば。
遙にへだてゝ。立ちかへり。
腕の強きと。いひければ。
頸の骨こそ。強けれと。

室君

室の海。
月の御舟に。棹さして。
梅が香の。
出で舟も。心ひく。

とりはづし。とりはづし。
思ふ敵ふれは。のがさゞと。
えいやと。引くほどに。
主は先へ。にげのびぬ。
さるにても汝。恐ろしや。
景清は。美尾の屋が。
笑ひて左右へ。のきにける。

作者不詳

波ものどけき。春の夜の。
霞む空は。面白やふ。
磯山遠く。にほふ夜は。
花ぞ綱手。ふりける。

此花ぞ綱手。ふりける。

蟬丸

花の都を。立ち出でゝ。
末白川を。うちわたり。
今は誰をか。松坂や。
あとにふるや。音羽山の。
松虫鈴虫。きり〳〵すの。
里人も。とがむふよ。
清瀧川と。知るべし。
關の清水に。影見えて。
駒のあゆみも。近づくか。
我ながら。あさましや。

作者不詳

うきねに鳴くか。鴨川や。
粟田口にも。着きしかば。
關のこふたと。思ひしに。
名殘をしの。都や。
鳴くや夕陰の。山科の。
狂女なれど。こゝろは。
逢坂の。
今や牽くらん。望月の。
水も走井の。影見れば。
髪はおどろを。いたゞき。

眉墨も亂れ。黑みて。
水をかゞみと。夕波の。

八島

月の出潮の。沖つ波。
海士の呼聲。里ちかし。
たゞ一帆の。風に任す。
月のゆくへに。立ち消えて。
影は絲に。うつろひて。
筑紫の海にや。續くらん。
海士の家居も。數々に。
霞みわたりて。沖やくや。
見えて殘る。夕まぐれ。

げに逆髮の。影うつる。
うつゝふの。我姿や。

作者不詳

霞の小舟。こがれきて。
一葉萬里の。舟の路。
夕べの空の。雲の波。
霞に浮ぶ。松原の。
海岸そこども。去らぬひの。
こゝは八島の。浦傳ひ。
鈎のいとまも。波の上。
海士の小舟の。ほの〳〵と。
浦風までも。のどかふる。

春や心を。さそふらん。

夜討曽我

さるほどに。兄弟。
これは祐成が。
文字消えて。薄くとも。
皆人の。かたみには。
水莖の。あとをば。
老少不定と。聞く時は。
老いたるも殘る。世の習。
おぼしめされよ。
肌の守りを。取り出だし。
形見に御らん。候へ。

作者未詳

文こま〳〵と。書きをさめ。
今はの時に。書く文の。
形見に御覽。さふらへ。
手跡に勝る。物あら〳〵。
心にかけて。とひ給へ。
若き命も。たのまれず。
飛花落葉の。ことわりと。
そのとき。時致も。
是は時宗が。
形見は人の。亡き跡の。

思ひの種と。申せども。
時致は。母上に。
今までは。其主を。
此世の。縁ふくと。
既に此日も。入相の。
諸行無常と。告げわたる。
涙を文に。巻きこめて。
詠せし人の。心まで。
かゝるや富士の。裾野より。
すご〳〵と跡を。見送りて。

俊寛

時を感じては。

せめて慰む。習ふれば。
そひ申したると。思召せ。
守り佛の。觀世音。
來世をば助け。給へや。
鐘もはや。こゑ〳〵に。
さらばよ急げ。急げ使。
其儘やる文の。千ぬ間にと。
今更おもひ。白雲の。
曽我に歸れば。兄弟。
泣きて留まる。あはれさよ。

作者不詳

花も涙を。そゝぎ。

別れを。恨みては。
もとよりも。此島は。
鬼あゝる。ところにて。
たとひ如何ふる。鬼ふりと。
天地を動かし。
人のあはれ。ふるものを。
亡くは我を。とふやらん。
先に讀みたる。巻物を。
くりかへし。くりかへし。
成經。康頼と。
もしも禮紙にや。あるらんと。
僧都とも。俊寛とも。

鳥も心を。動かせり。
鬼界が島と。聞くふれば。
今生よりの。冥途ふり。
此あはれふどか。知らざらん。
鬼神も感を。なすふるも。
此島の。鳥けだものも。
せめて思ひの。餘りにや。
又ひきひらき。同じ跡を。
見れども。見れどもたゞ。
書きたる其名。ばかりふり。
巻き返して。見れども。
書ける文字は。更になし。

こは夢か。扨も夢ふらば。
俊寛が。ありさまを。

さめよ〳〵と。うつゝふき。
見るこそあはれ。なりけれ。

(十五) 新議案

大和田建樹

(以下皆同作)

籠の鳥

(一)有明月の。かげきえて。
窓はやう〳〵。白みゆく。
草のまくらを。おきはふれ。
空にうたはん。時はいま。
いさむ翼を。いかにせん。
雲にいるべき。みちたえぬ。

(二)朝日はいまも。ふるさとの。
野邊より野邊を。いろどりて。
すみれの露に。にほふらん。
友の羽がひを。てらすらん。
ながめはてなき。天の原。
神のあたへし。庭ふるを。

(三)聲もとゞめぬ。我戀ひて。
まよふか母は。草かげに。
戀しやふれし。水の音。
あはれ夢みぬ。さきふらば。

歌ひし外に。おぼえなき。
　　囚のわが身。いつまでぞ。

(四)あれにぞみゆる。窓ごしに。
　　野寺の塔の。くもかすみ。
いまはおよばぬ。よその空。
　　うらやましきは。春の風。
あはれ慈悲ある。少女子よ。
　　親子の情は。われのみか。

霞む夕日

(一)霞む夕日に。おくられて。

花の雪ふむ。岡のみち。
たゝずむ影は。消えぬとも。
　　なほ奥ふかく。わけ入らん。

(二)菜種につゞく。山寺の。
　　森よりひゞく。鐘のこゑ。
雲雀を床に。いそがせて。
　　歌思ふ身に。志みわたる。

(三)野末はうすく。暮れそめて。
　　土筆つむ子も。歸るふり。
あすも又來ん。あふ戀し。

花よ胡蝶よ。春風よ。

夏の風

(一)神杉の。梢を染めて。
今ぞ時。いざや遊ばん。
みたらしも。我もくかたに。

夕日影。のこるもしばし。
今ぞ時。いざやすゝまん。
聲たてゝ。愛をぞかはす。
共にあそばん。

(二)星ひとり。光涼しき。
虫かごに。草つみ入れて。
その髪を。我こそ撫づれ。

たそがれの。宿をも訪はん。
子もつどへ。少女もつどへ。
その袖を。我こそ扇げ。
共にむつびて。

(三)岩井こす。水むと更けて。
窓の戸を。いくめぐりして。
あはれわが。世も夢ふりふ。

人の世の。夢しづかふり。
月の霜。ふむもいくたび。
薄だに。われを宿さぬ。
晝もありしを。

(四)露ふがら。眉うちあげて。
蓮葉は。裏もへだてず。
こゝちよの。朝ぼらけかな。

白百合は。我にぞふびく。
我みちに。起き臥しすなり。
極樂は。我心から。
おぞや世の人。

(五)天ぎらふ。雪かあられか。
瀧つせの。波かしぶきか。

こゝに我。生れしあした。
柴人の。たきゞに乘りて。

(六)うすぎぬに。身を包ませて。
襲ひくる。暑さも追はん。
夢さめば。母にかはりて。

(七)むかへねど。玉のうてなに。
まねかねど。しづの軒端に。
ふでしこの。咲く山かげを。

まだ知らず。怒る日かげを。
谷幾重。こえんとすれば。
松ぞともふふ。

枕する。乳兒よよく寐よ。
よる虫も。我ぞ拂はん。
風車。我ぞまはさん。
おもしろし世は。

あそぶふり。夜晝わかず。
ふるゝふり。朝夕さらず。
我宿と。思へば露も。

あられ

(一)芝生におちて。走り舞ふ。
ふれ〳〵白く。つもるまで。

(二)たゞよひうかぶ。いけ水の。
志ばしとまりて。ふほ遊べ。

(三)おぼろ月夜に。散る花の。

あひ宿りして。

いきほひたけき。玉霰。
あなはや色は。きえうせぬ。
すぎ志名譽の。花に似て。

落葉にをどる。玉あられ。
あふはや波に。きえうせぬ。
さだめなき世の。様に似て。

すがたをみせて。ふる霰。

拾ひ集めて。おくらんと。　うくる袂に。消えうせぬ。
　　戀しき人の。影に似て。

(四)空にたゝかひ。地にさけび。　まろびくだけて。ふる霰。
　勝つも負くるも。隔ふく。　同じ枕に。きえうせぬ。
　　わかき心の。慾に似て。

(五)松葉がくれを。命にて。　わづかにのこる。玉あられ。
　くだりしをりの。鬨の聲。　いづこの胸に。眠るらん。
　　童あそびの。夢に似て。

夕雲

(一)くちなしの。
　裙うちかけて。山の端に。　しばし休らふ。黄昏は。
浮世の戀の。おもかげを。　あつめて忍ぶく。ゆが姿。

(二)獅子と舞ひ。
　龍とおきふし。神のゆく。　橋わたしゝも。わが工み。
あらしのあとの。青空に。　かゝる命の。おもしろさ。

(三)足もとの。
山をふかぼの。うす紅葉。
かたみにおきて。いざいふん。
わが故郷は。霧のおく。
鹿の音とほく。響くかた。

沖と磯

(一)磯の山しろく。月は出でぬ。
けふもはや名殘。釣を止めん。
篝火たく影の。とほく動く。
戀しわが妻は。松のあふた。
得物かず見えて。舟にをどる。

(二)沖の色くれて。夜風さむし。
これぞ我いのち。いざや家に。
あはれ待つ人の。舟はいづこ。
空か海原か。はても見えず。
心ぼそ君が。日々のゆくへ。
馴れし艪の音の。あれに聞ゆ。
いまぞ我胸の。波ほとそに。

月と我と

(一)さしひく汐は。鼓のしらべ。
岩こす波は。太鼓のひゞき。

晝見し濱路は。せまくふりて。
たゞ二人。月とわれと。

(二)島かげ黑し。波路のすゑに。
月のみ白し。汐路のなちに。
晝見し釣舟。いまは失せて。
たゞ波と。月とわれと。

閣龍

(一)かぎりも知られぬ。海原に。
あらふみに。
命を捨てたる。丈夫の旅路。

あらしよはやてよ。吹かば吹け。

(二)日影もくもりて。波高し。
風あらし。
舟子の怒は。雷とぞひゞく。
丈夫の望みを。何とせん。

(三)雲路につゞける。波間より。
海路より。
陸こそ見えたれ。いさめや舟子。
あれ見よ黑きは。陸ぞ陸。

なごりをし

(一)花白くかすみて。暮れわたる山里。
ふごりをし見捨てゝ。かへるこゝろ。
春風ふきおくれ。里まで麓まで。

(二)かへりみる梢に。月もはやのぼりぬ。
いざやいざ春風。ふれもこゝに。
わが歌をはりなば。打ちつれ又もかん。

新體詩學 終

明治廿六年二月十五日印刷出版

正價金拾五錢

編輯兼發行者 大橋新太郎 日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 近藤圭造 麹町區飯田町五丁目廿六番地

發兌書林 東京日本橋區本町三丁目 博文館

版權所有

大和田建樹先生著述

通俗文學全書

國語といひ國文といひ和文學の流行も頗る極度に達したりと謂ふべし然れども之れを學ぶもの動もすれば古文學の一方に偏して現時社會の關係を忘れたるが如き觀なき能はず此に於て通俗文學全書の生れたる豈偶然ならんや其目的は貴族的にあらずして平民的文學の奬勵にあり其趣向は定義ずくめのむつかしきものにあらずして一般の文學智識と興味と共に得せしむるにあり故に卷の順序を立つるにも學問上の正法に依らずして讀者を倦ませしめざる一の變法を用ゐ以て結局に至り初めて大團圓の文學者たらしめん事を期したるのみ其每卷の目錄は左の如し

全部拾二卷 每卷讀切 ●每月一回洋裝美本

正價一冊（大判百六十頁以上）拾五錢○六冊前金八拾五錢○全十二冊前金壹圓六拾錢○郵便稅一冊六錢●廿六年一月ヨリ向一年間ニ完成ス

本書目次

第一編 修辭學
第二編 新體詩學
第三編 應用文學
第四編 應用漢文學
第五編 應用和歌學
第六編 記行文學
第七編 狂言評註
第八編 浄瑠璃評註
第九編 作曲評註
第十編 簡文組立法
第十一編 書組立法
第十二編 日本人傳

西洋のレトリックを應用して和歌和文の作法を趣味的に敎へたる書なり古來長歌等の沿革より說き起していはゆる新體詩の作法を敎へたる書なり何人たりとも解し易きやうに和文學の大意と獨學法とを指示せる書なり漢學從來の死法を假りて和文學と連絡せしむべき新法を指示せる書なり初學の人の十分に會得せらるゝやう和歌の詠法を平易に指示せる書なり旅行日記の文章の作例を揭げて一々これが批評說明を加へたる書なり音樂に合せて謠ふべき古今の唱歌にいとおもしろき評註を加へたる書なり能狂言のことばをとり集め委しき評註を加へて其詞を說き明したる書なり淨瑠璃の文句に新しき評註を加へて極めておもしろく說明したる書なり雅俗文章の組織法を新に工風してその書きかたを平易に敎へたる書なり男女の書簡文はその體相異なるものなるをその書方を平易に敎へたる書なり古今文學者の傳を時代の順序によりて普く列擧したる書なり